

日本応用心理学会主催 公開シンポジウム 2013

well-being の心理学 ～今、そしてこれからの well-being 研究の応用・実践～

- 話題提供者** 上出寛子（大阪大学大学院基礎工学研究科助教）
「人・環境の well-being な関係を目指す」
田中共子（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）
「社会・文化をつなぐソーシャルサポート」
堀毛一也（東洋大学社会学部教授，岩手大学名誉教授）
「持続可能な well-being をどう目指すか」
- 指定討論者** 藤森立男（横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授）
大坊郁夫（東京未来大学教授，大阪大学名誉教授）
- 企画委員会** 日本応用心理学会企画委員会
司会 大坊郁夫

このシンポジウムは，平成 25 年年 12 月 7 日（土）午後 1 時 30 分～午後 4 時に，東京未来大学にて開催されました。

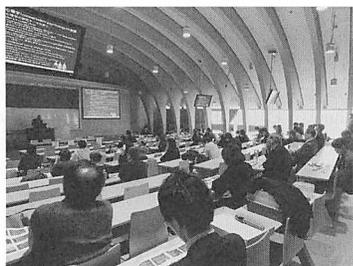
大坊：時間になりましたので，公開シンポジウム「well-being の心理学～今，そしてこれからの well-being 研究の応用・実践～」を始めさせていただきます。本シンポジウムは日本応用心理学会の主催で，企画は企画委員会が担当しています。そして，本学のモチベーション研究所が後援させていただいております。「well-being」については，確かに最近よく耳にするようになりました。この well-being については，個人の well-being と，それから社会的な well-being があると思います。社会としての，一種

の幸福さのレベルになると思います。

しかしながら，場合によっては，この両者がバッティングする可能性も否定できません。そうすると，この両者がどこかで併存できる，その合理理解どこかにあるはずだということは，われわれ科学者は常に研究，追究していかなければならないと思います。そして，これは well-being—幸福を，個人と他者との関係，社会環境，そのつながりの中で考えられなければいけないということをこのシンポジウムの大きな目的にしたいと考えております。本日のシンポジスト，指定討論者の紹介を後にさせていただきますが，本学会の藤田理事長にご挨拶をいただきたいと存じます。お願いいたします。

■理事長挨拶

藤田：皆様，こんにちは。日本応用心理学会理事長を仰せつかっております，日本体育大学の藤田でございます。本日は一般ご参加の皆様，学生の皆様，大学院生の皆様，そして本学会会員の皆様，師走に入りまして大変お忙しい中，また好天の土曜日のと



シンポジウム風景

ころ、東京未来大学に多数お越しくださいまして誠にありがとうございました。私どもの日本応用心理学会は、わが国の心理学関係の学術団体の中でも、日本心理学会と並んで古い歴史と伝統を誇っており、会員数は約1,300名でございます。本学会は社会に開かれた、また社会に貢献できる有意義な学会であると自負しております。その一環といたしまして、毎年1回、この時期に「公開シンポジウム」を開催し、そのときどきにふさわしいタイムリーなテーマをもって、社会にアピールすることで、本学会の社会的責務の一助としております。昨年度は、スポーツへの応用心理学からのアプローチを目的に「トップアスリートに役立つメンタル・マネジメント」を主題とする公開シンポジウムを企画いたしました。

今年は『well-beingの心理学～今、そしてこれからのwell-being研究の応用・実践～』というテーマの公開シンポジウムになりました。このシンポジウムをご企画くださいました、本学会の企画委員長でいらっしゃいます藤森立男先生、ならびに企画委員会委員の諸先生にお礼を申し上げます。また、シンポジウムをご後援くださいました東京未来大学モチベーション研究所の皆様にも厚く御礼申し上げます。シンポジウムの司会の労をお取りくださいますのは、東京未来大学学長でいらっしゃいます大坊郁夫先生です。大坊先生ありがとうございます。のちほど、大坊先生から本日このシンポジウムにご登壇くださいます4名の先生をご紹介くださるものと存じます。いずれの諸先生も、個人-社会-文化-環境などの領域では第一線でご活躍の諸先生でいらっしゃいますので、私達を大いに刺激してくださるお話をお聞かせいただけるものと思っております。私も皆様と一緒に勉強させていただきます。本日はどうぞよろしく願いいたします。簡単ではございますが、本学会の理事長としてのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

大坊：藤田先生どうもありがとうございました。それでは具体的に、本日のシンポジストの方々をご紹介させていただきます。その後、一人におよそ25分お話をいただきます。約10分程休憩を取りますので、その時に話題提供者への質問をメモしていただきたいと思っております。そして、二人の指定討論があります。一人10分程度です。その後、また会場

からのご質問を受けまして、両方の指定討論と、皆様方のご質問など、ご意見を踏まえまして、三人で25分ぐらいになるかと思いますが、質問への回答および補足をしていただきたく予定です。できるだけ会場におられる方々からのご意見をお受けしたいと考えております。

初めに三人の話題提供者を、そして指定討論の先生をご紹介させていただきます。上出寛子先生は、現在大阪大学の大学院基礎工学研究科の助教をされております。特にロボットと人間との関係について、社会心理学的な観点からの理論を応用しての実践と研究をなされておられます。非常に先端的な研究をされています。ヒューマン-ロボット・インタラクションという分野からのお話です。岡山大学の田中共子先生は、ご存知のように異文化適応、ソーシャルサポートの専門家でございます。特に留学生のサポートの問題などを幅広く研究されておられます。もちろんそれ以外にも、コミュニケーションのトレーニングなどにも携わっておられます。次に、堀毛一也先生は、東洋大学にいらっしゃいますが、日本でのポジティブ心理学の第一人者でございます。主観的well-being、サスティナビリティ（持続可能性）を基本テーマに据えられておられて、非常に幅広い国際的な活躍をされておられます。指定討論の藤森立男先生は、横浜国立大学（現所属：立正大学）におられますが、対人葛藤の解決、危機管理リスクコミュニケーションなども専門とされています。さらに、災害復興の問題、被災者に対する援助的なアプローチの研究をされておられます。加えて、大坊も討論をさせていただきます。

この後それぞれの先生方から、お話をいただきたいと思っております。



藤田主一理事長

■話題提供者の報告内容

人・環境の well-being な関係を目指す
上出寛子

(大阪大学大学院基礎工学研究科)

今日は貴重な機会をいただきまして、どうもありがとうございます。「人・環境の well-being な関係を目指す」というタイトルで、これまで行ってきたロボットと人間との関わりに関する研究を紹介させていただきます。よろしくお願ひ致します。まず研究の背景ですが、日本の労働人口が年々減ってきておりまして、50年後ぐらいには、半分ぐらいに減ってしまうと言われてます。この問題について経産省からはサービスロボットを私達の生活の中で活躍させることを目指し、いくつかの科学的、工学的課題が提示されました (Figure 1)。



上出寛子先生



Figure 1 サービスロボットの実用化構想
(<http://www.nedo.go.jp/content/100109957.pdf>)

このように私達の日常空間の中でこういったロボットが活躍するためには、工学の専門の先生方から見て安全なロボットというだけではなくて、私達のように一般的にロボットの機械的システムをよく知らないユーザーの視点から見ても親しみやすいロボットとは何かということを考えていかなくてはけません。例えば、ますます人間らしいロボットがどんどん開発されていますが、人間らしいロボットというものは、常に親しみやすいロボットなのかなど、そういった問題について社会心理学的なアプローチから、さまざまな研究を行う必要があります。この分野は特にヒューマンロボットインタラクションと呼ばれたり、ソーシャルロボティクスと呼ばれたりしますが、この分野の中で、わたしはこれまで社会心理学的な評価をいくつか行ってきました。

繰り返しになりますが、特に注目したいのは、ポテンシャルなユーザーの視点からロボットに対しての認知的あるいは、行動的、あるいは生理的な評価を行うということです。これまで私は主観的な認知の評価はもちろんですが、ロボットの非言語行動を操作したり、アミラーゼを測定したりしてきました。今日は認知的な評価についての結果を主に報告させていただきたいと思います。トピックは四つです。一つめにまずロボットをどのように評価したらいいのか。これまでさまざまな心理評価が行われてきていますが、どのような評価をすればいいのかについて報告します。また二つめは古くて新しい問題と言われてますが、人間らしいロボットのほうが親しみやすいのかどうかという問題です。三つめはロボットに限らず、ロボットの人間らしさ、人間における人間らしさの本質とは一体何なのかという話です。最後にロボットは人の well-being に関わることができるのかといったお話をさせていただきます。

最初に、ロボットをどのように社会心理学的なアプローチから評価すればいいのかという問題についてです。2009年にヒューマンロボットインタラクションの研究をし始めた以前にも、工学の先生方は、開発したロボットに対する印象評価の研究を一般ユーザーの視点ですすでに行っていました。ただしそこでよく行われていた手法というのが、SD法形容詞対による印象評価です。これ非常に簡単で使いやすい尺度であり、明るい、暗いとか、良いとか悪

いとか、反対語の対で聞いていく形式です。かなり簡単に用いることができますし、使いやすいツールであったので、多くの研究で使われていたのですけれども、一つ疑問になるのがSD法というのは元々、先生方のご存じのように、対人印象やパーソナリティを測定するために抽出されてきた形容詞をもとに作られてきたという前提があります。人間がロボットを評価する時にも、人間が人間を評価する時と同じような認知次元で評価しているのかどうかを確かめなければ、対人印象のために使われている印象評価尺度をそのままロボットの評価の尺度に使っていいのかということがわからないと私は思いました。そのため、それを確かめたうえで、定量化できるような尺度を開発しようと考えました。予備的な研究で、限られたロボットを使って調べたところ、若干対人印象と違う評価基準があることがわかってきましたので、もう少し大々的に一般的な印象評価尺度を確立することを目指しました。

まず研究1として、一般の人にロボットについてどう思いますかという自然な印象を聞いて、自由記述を集めて、5人の心理学者に集まっていたいで、KJ法的方法でカテゴリを抽出します。そこで、頻繁に使われている表現の言葉をもとに評価項目を作成しました。次に研究2として、作成した評価項目に基づいた定量評価を行い、因子分析によって印象を定量化できる尺度を作りました。ここでポイントになるのは、できるだけ一般的な尺度を作るという目的があったことから、大学生だけの意見だと、大学生専用の尺度になってしまいますので、その当時の日本の人口統計分布に従った10歳代から70歳代までの900人以上(研究1)の日本人男女を対象として、東京、大阪、福岡でそれぞれ研究を行いました。その後、研究2では2,600名ぐらいのまた違う10歳代から70歳代の方々を対象にして、会議室に来ていただいて評価をしていただいています。定性的なアプローチ、定量的なアプローチから一般印象の評価尺度を作ろうということです。

実際に行ったのは実機ではなくて、実機を提示した動画を見せています。用いたロボットは11体のヒューマノイドです。ヒューマノイドの定義は工学者の先生方によって全然違って、例えば二足歩行しないとヒューマノイドとは言えないとおっしゃる先生方もいらっしゃる一方で、足の不自由な人間の

ことを人間じゃないと言うのか、という先生もいたりします。なので、今回の研究ではこういった車輪型のロボットか、自立歩行する二足歩行ロボット、そして人間そっくりのアンドロイド(アンドロイドは歩きません)も数多く入れています。各ロボットの開発者の先生方にお伺いをして、ロボットの能力を網羅的に示しているかどうか、可能な人間との関わり合いのあるシチュエーションを網羅的に映しているのかどうかをチェックしていただいたうえで、11種類のロボットの動画を作成いたしました。

動画に関しては、ロボットのセンシングにかなり時間がかかる場合もあるのですが、そういったところも含めてすべて提示しています。それはなぜかというと、一般の人々に今現状のロボットが一体どのようなものであるのかということ、きちんと確信していただくためです。アンドロイドの場合にはこのようにモデルになった人がいるというのが特徴になっておりますので、モデルの方にも登場していただいております。アンドロイドに関しては、この時点では男性1名、女性2名のアンドロイドを使っています。現時点では、ジェミノイドDKと呼ばれるデンマーク人の男性のアンドロイドが開発されていますが、この研究をした当時にはそのロボットがなかったため、ロボットは、男性のアンドロイドは1体になっています。

研究1で得られたコメント数は17,000コメント以上集まっています。各ロボットにつき、1,500ぐらいでした。作った尺度項目数は50項目程度で、因子分析の結果、因子負荷量の問題でだいたい40項目まで減らされています。因子分析の結果を見ると、9因子項目になりました。この因子項目の内容は、研究1で示した定性的なカテゴリの結果と非常によく類似しています。大きくまとめると、人間はロボットに対して、親和性、技術の評価、人間性の評価(人間と比較してどれぐらい類似しているのかという評価)をすることがわかりました。大きく分けて三つあり、細かく見ると九つの認知次元があります。こういった尺度を利用して、さまざまなロボットの評価ができるのではないかと考えていました。こういった評価を用いてロボット工学と共同研究することで共存可能なロボットの開発に役立てていきたいということです。

この尺度を使って次に、先ほどのアンドロイドの

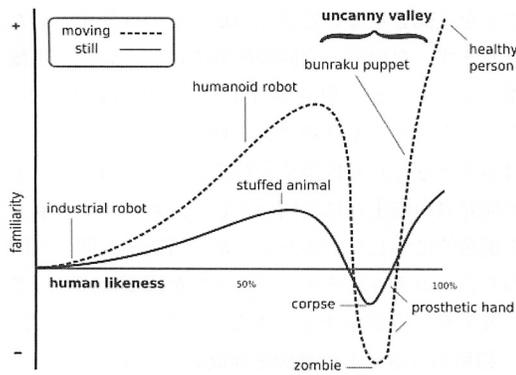


Figure 2 不気味の谷 (Mori, 1970)

ような人間らしいロボットは、一般の人にとってどれぐらい親しみやすいのかということ、データを用いて分析してみました。日本ロボット学会の研究専門委員会が、ロボットの親和性とは何かという定義をしています。人間らしさと親しみやすさの関係に関しては、「不気味の谷」という理論が非常に有名です (Figure 2)。

例えば、ロボットがますます人間らしくなるにつれて、この縦軸の Familiarity は高くなっていきますけれども、ある一点を越えるとガクンとこの Familiarity が下がってしまう。この下がったところにはゾンビとあります。例えば、先ほど見ていただいた人間らしいアンドロイドは、そのままで人間のようなのですけれども、少し人間と違うといったこのわずかな差異が、気味悪さを喚起してしまうという可能性があります。これは理論として提唱されているものなので、研究 2 で得られた定量的なデータでも分析してみようと思いました。

そうすると、Figure 3 の上のほうの曲線が Humanness と Familiarity の関係なのですが、曲線的な関係になっています。こちら (Figure 3 の左のほう) には Humanness の低い、ロボットらしいロボットがあります。その中でもガチガチした関節に指が挟まれそうな印象のものは、若干親しみやすさが低くなっていて、ラウンドシェイプのほうが、人間らしさは低いながらも、若干親しみやすさは高くなっています。ロボットでは、Humanness の中でちょうど真ん中で、親しみやすさもまあある程度高い。ロボット s と h は、人間らしいのですけれども、どこかが人間と違うところがあり、親しみやすさが下がっています。ただ女性のアンドロイドに関して

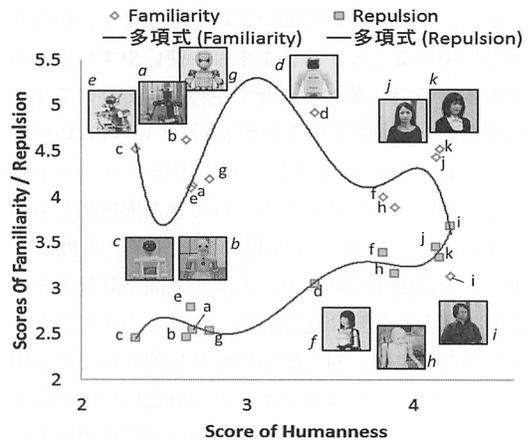


Figure 3 認知された人間らしさと親和性・嫌悪感の関係 (Kamide et al., 2013)

は、人間らしさが高くても、親しみやすさが上っていて、男性のアンドロイドは人間らしさが高く、親しみやすさが低いという結果になりました。

例えばロボットではテレビのコマーシャルやニュースにたまに出て来ますので、「あ、このロボット見たことあるなー」といったような、単純接触効果のような効果が働いているかもしれません。またアンドロイドに関しては、元のモデルに対する対人印象が交絡している可能性がありますので、そういったことも加味して、データの出方を解釈する必要があるかなと思います。

Repulsion というのは何かというと、先ほどの因子分析の結果出てきた一つの因子で、ロボットの存在が人間同士の関係をダメにしてしまうとか、ロボットのせいで人間の存在意義がなくなってしまうのではないのかというような、ロボットの存在価値に関するネガティブな評価を示す因子です。これに関しては、Familiarity の結果とは異なり、人間らしくなればなるほど評価が高くなるという、比較的に線性的な関係が出ています。これは重要な点ではないかと思えます。すなわち、ますます人間らしいロボットのほうが、そういった“存在”に対しては、ますます嫌悪感が抱かれやすいということになっているということです。例えば、ロボット k や j は、人間らしさが高く、かつ、ロボット自体の親しみやすさは高いと評価されたにも関わらず、やはりロボットが存在するということに対する嫌悪感は比較的高い。なので、こういった嫌悪感と人間らしさの直線的な

関係を乗り越えるための議論というのが、今後必要になるのではないかと思います。単にロボットが親しみやすい外見をしているかどうかではなくて、このロボットを私達の日常生活に受け入れるべきかといった、価値的な認知判断を考える必要があります。

これだけロボットの人間らしさが重要になってきているのですけれども、元来、人間らしさというものを私達はどのように認識し、判断しているのかということについて、考えてみたいと思います。先ほど紹介した一般印象の尺度の中においても、人間性という評価次元があったのですが、かなりジェネラルな意味内容でした。例えば、ロボットの動きや見た目が人間と類似しているかどうかという評価や、人間のような意思を感じるかどうかといった内容になっています。そこでさらに、人間らしさとは何かという中身についてもう少し考えてみたいということです。

まず、どうして人間らしいロボットを作るのかという理由についてですが、そもそも私達がこういったメディアに対して擬人化してしまう傾向があります。テレビやパソコン、携帯電話に関しても、ある程度私達が擬人化しながらそれらを扱うことによって、スムーズにメディアとのやり取りができるため、人間らしいメディアを開発したほうがよいと言えます。例えば二足二腕のロボットに関して言うと、人間が、このロボットが物を説明する時にきつこういう身振り・手振りをするだろうという期待をするので、ロボット側もあらかじめ人間らしい動作を行うことによって、人間との情報のやり取りがスムーズにいくといった円滑化の効果があるということです。あるいは、アンドロイドのような人間らしいロボットを作ることによって、人間とは何かを理解していこうという構成論的なアプローチから、サイエンスとしてのロボット開発が進んでいます。

また、日本においては、ロボットの文化が特徴的だということがたびたび言われたりします。鉄腕アトムやガンダムといったさまざまなアニメの文化、漫画の文化があります。そのため、日本人はロボットに対して親しみやすい傾向を持っているのではないかと思います。ただ実際データでは、日本人はアメリカ人と比べると、人間らしいロボットに対しては拒否感が高いということがわかっており、こういった文化的背景を考慮すると、日本

におけるロボットの人間らしさとは、海外と全く同じではないかもしれないということがあります。そこでそういった人間らしいロボットにおける、心理的に認知された人間性を検討しました。

社会心理学の分野では、この人間らしさの評価に関しては *anthropomorphism* という言葉で研究がされています。日本語に訳すと擬人化という話です。擬人化というのは、見た目人間らしいという単なる *humanlikeness* や、生きている感じがするとかではなく、人間ではないエージェンシーに対して、人間らしい性格特性やモチベーション、意図性あるいは感情といった内的な心理的メカニズムまでを読み込むということです。特に、従来は二つの尺度で評価がされています。一つめが *Mind Perception* と呼ばれるもので、2次元あります。一つは *Experience*、痛みや飢え、痛みなどが体験できているかどうかという軸になります。もう一つが *Agency* であり、これは自己を制御したり計画を立てたり、コミュニケーション、思考ができるかどうかという評価です。例えば神様は *Agency* の評価が高く、*Experience* の評価が非常に低く評価されます。

二つめは *Human Essence*、人間の本质という尺度で、これも2次元です。一つめが動物と比較した時に明らかになってくるような人間らしさで、社会的な洗練さや合理性、成熟さであり、*Human Uniqueness* と呼ばれるものです。もう一つがメカと比較した時にあらわれるような人間性で、例えば、感情的反応性、知的好奇心表面的ではなく深みがあるというもので *Human Nature* と呼ばれるものです。これまで海外では沢山研究が行われていて、アメリカやドイツやオーストラリア、欧米文化ではそれぞれ綺麗に2因子に分かれることがわかっています。ただし、先ほど言いましたように、日本では人間らしいロボットに対して、認知的に特徴的な反応が見られるということは、こういった因子構造ももしかしたら違う可能性もあります。

そこで、1,200人の日本人を対象にして、6体のロボットと二人の人間を対象に、二つの尺度の日本語版で評価を行ってもらいました。*Mind perception* と *Human essence* の項目は、人間性は *Non-human agent* から人間に至るまで、連続線上に評価されるであろうということを前提としており、ロボットでも人間でも評価対象にすることができます。6体のロ

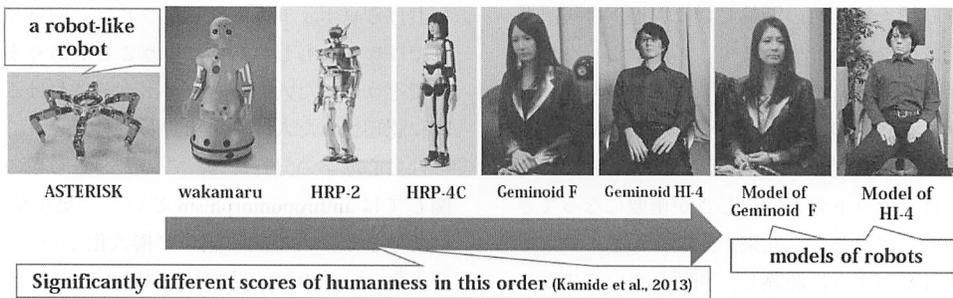


Figure 4 人間らしさの評価に用いた刺激写真

ロボットは、私のこれまでの研究で、human-likeness、一般的な人間らしさの評価が段階的に違うことがわかっているのので、この写真を選びました。また、かなりロボットらしいロボットも入れようということで、うちの研究室のASTERISKというロボットもいれました (Figure 4)。

操作チェックですが、やはりASTERISKからGeminoid HI-1までは、human-likeness、一般的な評価はそれぞれ順に異なるということがわかっています。メインの因子分析の結果ですが、Mind perceptionの尺度はAgency, Experienceに分離し、Human essenceの尺度はHuman natureとHuman uniquenessで分離しますが、同時に、因子項目のポジティブ、ネガティブでも分離することがわかりました。例えば、Experienceの場合は、楽しみ、願望、個性、意識、プライドというポジティブなExperienceと、空腹、恐怖、苦痛、怒り、困惑というネガティブなExperienceに分かれています。Agencyのほうはよく見るともともと、自制、道徳、記憶、感情認識、計画、コミュニケーション、思考といったニュートラルあるいはポジティブなアイテムのみなので分かれています。Human natureの因子も、好奇心旺盛、友好、楽しいこと好きというポジティブな因子と、攻撃的、注意散漫、せっかち、といったネガティブな因子に分かれています。すなわち日本においては、人間らしいロボットを作った場合に、ネガティブな人間らしさまで同時に促進してしまうようなロボットを作ると、受け入れがたい可能性があるのので、ポジネガの区別を認識する必要があると思います。

最後にwell-beingに関して、ロボットは人を幸せにできるのかという話です。well-beingの話は堀毛先生が多分かなり詳しくされると思うので、私は簡

単にしか言いませんが、自伝的物語の研究をしていた際に、人は金銭や社会的地位、物質的なものではなくて、個人的な成長や対人関係を重視するほうが幸せだということがわかっています。日本でも、そういった内在的な価値観を持っている人達が、知能が高かったり、対人関係がうまくいっていたりします。ロボットのことを考えると、物質的で、今で言えば、便利で高い機械、高級車みたいな価値があるかと思います。そういうものに対して、保持・所有することを追及するということが自体が、人間のwell-beingに対してポジティブに働くのかどうかということを、考えないといけないのではないかと思います。ただこれは人間の受け止め方次第という可能性があり、ロボットを単にmaterialisticなものとして認知してしまうと、ハピネスの度合いは低くなるかもしれませんが、何か自分自身の成長に役立てたり、対人関係をよくするような内在的な使い方を積極的に見つけていくことが大事なのだと思います。これからは、ロボットをどのように扱うべきかという社会におけるロボットの価値を研究していかないと、ロボット化社会における人の幸せのあり方を実現することが、難しい場合も出てくるのではと思っています。では、これで終わります。どうもありがとうございました。

引用文献

- Kamide, H., Kawabe, K., Shigemi, S., & Arai, T. Relationship between familiarity and humanness of robots—Quantification of psychological impressions toward humanoid robots—, *Advanced Robotics*, accepted. (In press)
- Mori, M. 1970 The uncanny valley, *Energy*, 7(4), pp. 33-35. (<http://www.nedo.go.jp/content/100109957.pdf>)

社会・文化をつなぐソーシャルサポート

田中共子

(岡山大学大学院社会文化科学研究科)

こんにちは。岡山大学の田中共子です。私が今住んでいるのは岡山ですが、出身は東京です。東京未来大学は初めてですが、ラブリーな大学ですね。周辺の町の環境がどこどなくホッとするような、この東京の中でも故郷感が漂うようなところに、魅力を感じます。

今日は社会と文化をつなぐソーシャルサポートという話をさせていただきます。well-beingという言葉のルーツは、1946年のWHOの憲章草案に見ることができます。私達はそこに由来する、身体的、精神のおよび社会的に良好な状態、という定義を見慣れていると思います。心理学の中ではポジティブ心理学の流れと深い関係があって、そのお話は次の堀毛先生に詳しくお聞かせいただけたらと思います。しかし最近の現代用語の辞典を見ると、現代的なソーシャルサービスの達成目標と書いてあったりして、社会福祉の文脈でも使われていることがわかります。背景には福祉観の転換があって、つまり一部の社会的弱者を対象とした貧困救済ではなく、予防、促進、啓発のソーシャルサービスへ、という考え方の変化があると言います。

今の世の中では、well-beingはどういうふうに使われている言葉なのだろうか、と思ひまして、ウェブでウェルビーイングという語を打ち込んで、検索にかけてみました。例えば、〇〇ウェルビーイング・コンソーシアムというウェブサイトが出てきました。これは〇〇地域のイベントプログラムのよう



田中共子先生

です。地域振興のため、住民の身体的、精神的、社会的な健康を達成するという企画でした。次の例では、社会福祉関係の事業所名として、一般社団法人の〇〇ウェルビーイングという看板が出ていました。それから、おもしろい例がありました。通販でウェルビーイングが買えます、と書いてあるウェブサイトを見つけました。豊富なラインナップでウェルビーイングが買えます、全国一律290円の送料です、翌日お届けできますとあります。買えたらいいですね、ウェルビーイング。売ってくれるなら、なんとありがたいことでしょうか。実はこれは、リラックス用のお香の宣伝でした。こうした例を見てみると、ウェルビーイングには何か良い状態になれるような響きがあって、体や心や社会にいいことがもたらされるような、そんな期待を込めた使い方がされているように思います。

本日の主題はwell-beingの心理学ですが、ではこれをよく生きるための心理学と見るなら、われわれは応用心理学会なので、よく生きるための応用心理学を考えてみましょう。研究の流れを見て、実践的・応用的な展開を考えて、そして個人と社会のwell-beingを考えていこうと思います。私がいただいたタイトルは、「社会・文化をつなぐソーシャルサポート」ですので、これを、社会や文化を人がつないで“良く生きる”ことを目指す実践的な心理学、と解釈してお話ししていきます。特に、社会と文化ということで、現代社会の課題となっている国際化と高齢化に焦点を当てたいと思います。そして文化や社会を「つなぐ」という視点ですが、まず文化をつなぐという意味では異文化滞在者とホスト、社会をつなぐという意味では高齢者と若者の関係を考えてみたいと思います。こうして人と人とのつながりを、異質さを越えた対人関係形成という視点で眺めながら、well-beingとの関わりを読み解いていきたいと考えています。

さて何かと話題になる国際化、高齢化ですが、ちょっと数字で確認しておきましょう。平成25年度の出入国管理白書を見ると、在留外国人は2012年末に203万人です。この20年間で6割増えたそうです。日本人の海外渡航者のほうは1,600万人を超し、訪日外国人も800万人を超えています。われわれは国際的な流動性が高まってきた時代に生きているようです。一方で、平成25年の高齢社会白書

を見てみましょう。65歳以上のお年寄りの数は、2012年には過去最高の3,000万人超となりました。総人口に占めるお年寄りの割合は、約4分の1にのぼっています。増えていく外国人や高齢者とうつき合うのかは、現代の応用心理学のホットな話題と言えるでしょう。

私の研究から紹介する最初の話は、在日外国人留学生の異文化適応についてです (Okunishi & Tanaka, 2013)。異文化適応に対して、ソーシャルサポートやソーシャルスキル、語学力、日本滞在年数がどのような影響を与えているのかを、質問紙調査を行って調べてみました。われわれの仮説は、次のようなものです。まずソーシャルスキル、これは人づき合いの要領のことで、人とうつき合うことを上手にする技能やコツを意味します。このスキルがあるとソーシャルサポート、つまり人からの有形・無形の助けが得られるのではないかと、そして異文化適応がより進むのではないかと考えました。そこで測定項目として、適応、サポート、スキルを測りました。分析していきますと、適応は3因子から構成されていると考えられました。因子1は低症状型の適応と名づけました。孤独感やストレスが低いなど、不適応症状が少なく、臨床心理的な状態が良い状態を意味していると言えます。因子2は自己調節型の適応と名づけました。これはストレスの対処がうまくて対人志向性が高い、いわば周りによく馴染んでいくような適応です。因子3は満足型適応と名づけました。日本生活の充実を表すような項目からできています。サポートのほうは1因子と考えられました。勉強を教えてくれる、日本文化を教えてくれる、楽しいことや励ましをしてくれる、情報をくれる、日本語を教えてくれる、物質やお金をくれるという6種類のサポートを、どのくらい相手に期待できるかを尋ねています。聞くときは、日本人から、同国人から、他の外国人から、という3種類のリソースに分けて、これらのサポートが期待できるかどうかを尋ねています。異文化間のソーシャルスキルの項目は、われわれの先行研究をもとに設定しました。日本人ホストとこんなふうにつき合える、と異文化滞在者が考えたことを抽出したものです。敬語をうまく使ったり、周りの人を尊重しながら話す態度を示したり、謙遜や遠慮を取り入れるなど、日本的な文化行動を理解して、誤解なく解釈しながら、

時には取り入れて自分でも使ってみるというものです。また、なるべく日本語で通すとか、自分の国のことをちゃんと説明してわかってもらうなどの努力もしています。誤解が生じた場合には、それを解いていく行動も必要です。社会的なルールとして贈り物のやり取りや、同性・異性との関わりの規範を尊重することも含まれます。感情面では、周りの人の気持ちを尊重したり、自分の感情表現が適度になるよう調整したりします。最も難しいようなのが、間接表現です。多くの留学生が、日本人による婉曲で示唆的な表現を、的確に解釈したり使いこなしたりするのは大変だと言います。留学生にはこれらのさまざまな異文化間ソーシャルスキルを、どのくらいしているかを尋ねました。

分析の結果、わかってきたのは次のようなことです。日本人からのソーシャルサポートがあると、日本的なソーシャルスキルの実施が促されていきます。そして周りによく馴染むタイプの、自己調節型の適応が高くなります。この意味では、サポートがあればスキルが高まり、適応が進むという促進関係を読み取ることができます。一方、語学力は適応に対して、それとは独立に影響を与えています。日本語力は不適応症状を軽減する役に立っており、日本滞在の満足感を上げる効果もあるようです。興味深いのは、英語力の影響です。英語は日本のホスト言語ではありませんが、しばしばホストとの媒介言語として使われています。留学生が日本人と英語で話すとか、外国人同士が英語で話す姿を、大学でもよく見かけるでしょう。英語力があると不適応症状は軽減され、周りの人と馴染むにも役立つと言えるようです。ただし日本生活の充足感や満足感を感じるには、英語力はマイナスの効果を持っています。つまり媒介言語である外国語にあまり頼ると、日本生活に浸って満足感を得るという点では不利になることがあるのです。なお滞日年数、同国人のサポート、他国人のサポートに関しては、有意な結果は得られていません。

これらの結果から、在日留学生の異文化適応には、次の二つが結論できるでしょう。まずホスト社会との関わりは、適応を促すらしい、ということです。日本人ホストのサポートが高いと、そして日本語力が高いと、適応は高まるという関係が見られました。ただし滞日年数の効果は有意ではないので、

年数が長ければ適応するとは言えません。適応は単に年数で決まるのではなくて、ホストとの関わり方次第なのではないかと思われます。

二つめに、英語力の適応への影響が両義的だということです。英語力が高いと不適応症状は減るし自己調節型の適応も上がる傾向にあります。他方で満足型の適応に不利です。これは英語と日本語のシーソー関係を想定することで、理解できます。英語への依存は、ホスト社会との交流を限定してしまい、日本滞在ならではの充足感や満足感を得にくくなるのかもしれませんが。臨床症状の軽減には有用だけれど、社会文化的な適応には不利です。身体的にも精神的にもよい状態なのに、社会的にはそうとも限らない、という状態を考えることができそうです。つまり「身体的・精神のおよび社会的に良好な状態」を well-being と呼ぶ場合、この三側面がいつべんには満たされない可能性があるということです。これは well-being を考える際の、重要な問いになると思います。

さてここまでの結果には、受け入れ社会としての日本の特質が響いているとも言えます。われわれは独特な言語と文化を持ち、単一民族的な歴史が長かったこともあって、内集団を大事にしがちのようです。とりあえずグループに所属して、そこでサポートを得ることが肝要で、そうすれば日本のやり方がわかってくるから、次第に社会にも馴染んで幸せになれるだろう、という予想をたてることができます。ここから示唆されるのは、well-being を高めるには、ホストの社会や文化とのつき合い方に目を向ける必要がある、ということになりますね。

逆に、日本人が海外に行く場合についても調べてみました。在米日本人留学生の異文化適応に関する研究結果を紹介しましょう (Yashima & Tanaka, 2001)。1年間の交換留学に行った高校生を対象に、質問紙調査を実施しました。アメリカの高校生活用なので、測定内容は在日留学生と異なりますが、やはり適応、サポート、スキルを測っている点で共通しています。語学力には、ホスト言語である英語の能力を見ました。日本語力は社会的通用性が低いうえ、調査協力者はみな日本語ネイティブなので、日本語能力を測定する必要は特になくと思われます。仮説は在日留学生のときと同様です。スキルがサポートに働きかけ、それが適応を促進すると見る、スキル-



田中共子先生講演風景

サポート適応促進仮説を想定しました。適応を測るのには、アメリカ人との友情への満足度、環境への満足度を使いました。ソーシャルサポートはサポートの質、問題解決、コンパニオンシップについて測っています。異文化間のソーシャルスキルは、先の研究をもとに場面別にリストし、学校や家庭でそれらをうまくやっているかどうかを尋ねました。例えば、学校での出来事を家族に話すとか、相手にイエスとノーを明確に表現するなど、アメリカの社会文化的文脈に即した行動を挙げて、それらの実行度合いを聞いています。

結果を見ていきますと、英語力すなわち英語によるコミュニケーションコンピテンスは、ソーシャルスキルの実施に正の影響を与えています。そして、ソーシャルスキルの実施度が高いと、アメリカ人のサポートがより多く得られる結果になっています。それがさらに社会文化的適応に有利に働いていく、という関係が読み取れました。在日留学生の場合は、サポートがあればスキルが得られ、その先に適応がある構図でした。しかしアメリカでは、スキルが先でサポートが後という逆転が見られました。また興味深いことに、日本の結果では語学力は独立して適応に影響していたのですが、アメリカの結果では英語力はスキル実施を介して、間接的に適応に影響を与えていました。これはどう考えたらよいのでしょうか。

在米日本人留学生の異文化適応については、次の2点が浮かび上がってきます。まずホスト社会との関わりは適応を促す、ということが言えるでしょう。アメリカのスキルを使えば、アメリカ人ホスト

のサポートが得られ、そしてアメリカ人との友情や滞在先の環境への満足度が高まっていくという流れを想定できます。重要なのは、スキルがあれば関係ができるということです。英語力は、スキルという人に伝わる形で使われた時に、関係形成に役立つということ、そしてそれがサポートを得て適応に至る前提として機能すると見ることができます。英語力の適応への影響は、この意味で間接的なのです。直接適応を高めるものではありませんでした。海外滞在に必要な力というと、日本ではすぐに語学力に注目してしまいがちですが、このデータが示唆することは、英語力だけで適応するわけではない、ということかもしれません。ここでは、言葉は相手に伝わる表現として使われて、関係形成を介することで適応に資するものになったと言えます。ということは、社会的に良好な状態になるために語学力が使われることが重要だ、ということでもあります。この現象は、受け入れ社会としてのアメリカの社会的な特徴を考えていくと、より納得できるかもしれません。彼らはよく主張をし、低コンテクスト表現を駆使し、直接的な交渉をよくします。よく言葉にして話して、意思疎通に努めることが求められる社会です。ここには英語圏であり、多文化社会であり、独立性や個人主義を重んじるという背景があります。だからこそ英語力があっても、スキルにして人に伝えないと、なかなか適応促進の機能を果たすには至らないのかもしれませんが。翻って日本の社会環境では、まずグループに属してそこで仲良くやれば、次第にスキルが身につくという順序が想定されます。この影響関係には、受け入れ社会の文化的特徴が反映されているのかもしれませんが。そこでこの研究からの示唆をまとめますと、well-beingを高めるなら、ホストの社会や文化とのつき合いを考える必要がある、ということになり、この結論は先の在日留学生研究と同じです。しかしどのように関わるかという点に、社会のカラーが垣間見えるように思います。

では社会や文化に馴染めばそれでいいのかというと、そうとも言えないようです。この点で示唆的な適応研究を紹介しましょう。研究3として、日本との文化間距離が大きい、ムスリムの方々の日本での異文化適応についての、半構造化面接調査の結果を見てみます(中野・田中・奥西, 2013)。何か困っていることはないですかと尋ねると、彼らは礼拝の

場所の確保に困る、食事場面での制約に困るなど、日本文化との差異に起因する困難を、さまざまに語ってくれました。あわせて困難への対処法も聞いてみました。すると日本に合わせられるところは合わせながらも、自文化を貫くために交渉したり、時にはホストとの交流自体を回避したりしていることがわかりました。つまり異文化適応といっても、ホスト社会に交わって異文化理解を深めたり、文化特異的なソーシャルスキルを獲得して、自分の認知や行動を調節したりといった、ホスト社会への合流を図るような社会文化的な適応観には必ずしも即していません。彼らは、ホストからの距離を確保して心の安定を図ることがあり、われわれはこれを併存型適応と呼ぶことにしました。

このような現象から得られる示唆をまとめると、well-beingを高めるには、ホストの社会や文化とのつき合い方を抑制することもある、ということになるのでしょうか。こう考えてくると、精神的・社会的に良好な状態というのが、どのようなことを指すのか、ますます難しい問いになってきました。一体何をもちょうど良好だと判断するのか、どのように評価するのか、ということを考えていかざるをえないように思われます。宗教をはじめとして外国人がホストとさまざまな違いを抱えているということ、それは確かだとしても、ではそれゆえに外国人とつき合うのが難しいということになるのでしょうか。一般的な大学生は外国人とのつき合いだけが難しいのか、それとも何らかの形で異質などがある相手なら、そもそもつき合いが難しいのか、つまり外国人に限らないことなのか。対人関係形成の困難に対する「異質さ」の影響を知りたいと思いました。そこで次のような質問紙調査を実施してみました(田中・高濱, 2012)。交流する相手として外国人だけでなく高齢者、子ども、同世代の社会人、それから他の大学の学生などを挙げてみました。そしてそういった人達との関係づくりが難しいとしたら何によると思うのか、すなわち対人関係形成の困難の原因認知を、日本人大学生に尋ねてみたものです。分析の結果わかったことは、回答した大学生達は、外国人が嫌というより、話す難しさの前に立ち止まっているらしいことです。関係作りが難しいのはどうしてかと聞かれると、関心がないから、という項目への評価は総じて低いので、無関心というのとは違うよう

です。外国人が話しかけてきてくれたら話してもいい、という気持ちは持っています。しかし話しかけ方がわからないと困惑したり、話題がなくて呆然としたりしています。つまり拒否ではなくて、つき合い方にとまどっているという感じです。彼らの態度は、総じて受身です。

異質さがあってもつき合っている例は、あるはずで、日本人同士の世代間なら、日本語が通じるから道具的な困難は少ないでしょうし、対象者は人数的にもたくさんいます。異質さを超えてつき合う例と、つき合わない例を探してみることにしました。実際に高齢者と若者がどんな風に交流しているのか、いないのかをつきとめようと考えて、大学生と高齢者に半構造化面を実施してみました (Tanaka, 2013)。若者とあるいは高齢者と、どんなふう 접촉し、関係を保ち、交流していますかと尋ねた、探索的研究です。その結果、高齢者は大きく二つのグループに分かれてきそうなことがわかりました。一つは異世代との交流を遠慮してしまう人達です。この人達は若者との接点は希薄ですが、関心がないわけではないようです。これを第一グループとしますと、第二のグループは、活動的交流群とでも言えるような、異世代の人達との接点を持った人達です。彼らは年齢を意識せずに活発に異世代と交わり、脱カテゴリー的な交流を実行しています。高齢者カテゴリーを脱したかのような生き生きとした、年齢を意識しない交流が行われています。異世代と共通の趣味や関心を持ち、年齢という差異への注目は相対的に小さなものになっています。

一方で若者は、およそ3グループに分かれてきました。第一は交流願望群としました。実際の交流は多くはありません。しかし高齢者が自分を受け入れてくれるなら、交流はしたいという気持ちがあります。内心では高齢者から理解されたい、認められたいという願いを抱えています。第二は否定的経験群です。彼らは、否定的なお年寄りのステレオタイプに即したイメージを持っています。過去にそのような特徴を印象づけられるような出会いの機会があった、と語っています。そしてそれゆえに交流に期待しなくなった、と述べています。第三がおもしろいのですが、これは高齢者が好きな若者達です。交流育成群としました。高齢者を好み、心地よく交流している若者達がいる、語りにはある共通点がありま

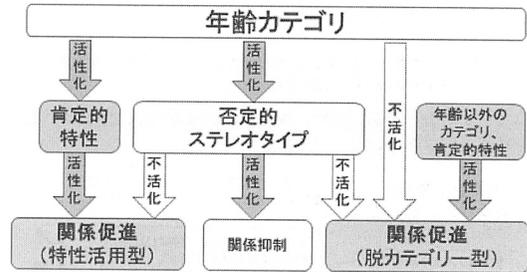
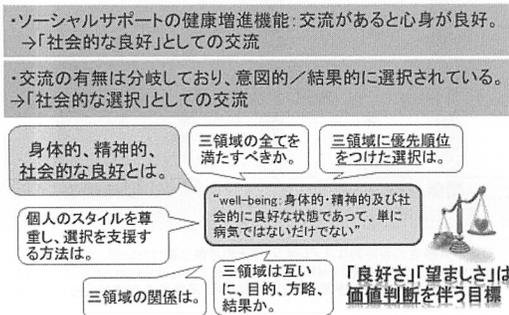


Figure 5 世代間関係の三作用仮説

す。お年寄りとのつき合いのメリットを語ることで、お年寄りなら警戒心はいらないし、親切で安堵できるという人がいます。大学生相手のように気づかなくてもいい、自分がエンターテインしなくていいから楽だという人がいます。お年寄りは自分をリードしてくれるし、寛容だし、リラックスできるという人もいます。高齢者と喜んで交流する若者は、確かにいるのです。

これらの結果から、世代間関係には3通りのパターンを考えてもよいだろうと思います (Figure 5)。まず高齢者ならではの特徴が、良いほうに出れば関係は促進されていくのですが、これを特性活用型と考えてみましょう。ところが否定的なほうの特徴が前面に出てしまうと、否定的ステレオタイプのほうが活性化してしまいます。これは関係の抑制に辿りつきます。そして年齢以外のカテゴリーが顕著で、肯定的な特性を持っている場合、例えば同じ麻雀仲間とか、フラダンスの仲間とか、何らかの特性が活性化している場合、これは脱カテゴリー的な関係が促される可能性があります。仮説生成を考えるなら、この三つのスタイルへの分岐仮説を提案できると思います。世代間関係は難しいと言われますが、若者は高齢者の否定的なステレオタイプとの接触を避けただけかもしれません。つまり厳密に言えば、高齢者を避けたいのではなく、否定的な面を避けたいのです。三つの分岐にはそういう含みがあります。すなわち、加齢に対応した性質は、実際の関係の中で生かされたり抑制されたり、無視されたりしていきます。年齢の意味を巡る認知と行動にあわせて、関係性の有無が分岐していくと考えてよいのではないのでしょうか。この研究から得られた示唆を挙げるなら、異質さがすべて拒否されるというよりも、異

Table 1 “異質さを伴う人との交流”からの問い



質さというものが意味を持ったり持たなくなったりしていく経路があるのではないかと、ということです。

それでは全体のまどめに移りましょう。異質さを伴う人との交流から、どんな問いが可能なのか、そこから得られる示唆は何かを考えていきましょう (Table 1)。まずソーシャルサポートの健康増進機能、これは心理学ではよく知られた発想です。この仮説を支持する現象は、数多く報告されています。人との交流があれば、心身がより良好な状態になるというデータは国内外で示されています。交流は、「社会的な良好」の姿であり機能でもあるということでしょう。われわれの一連の研究の中でも、サポートの肯定的な効果はしばしば見られました。しかし交流の有無には個人差があり、ある人となない人が分かれています。この人は大いに交流があるけれど、この人にはそうでもないという場合が見られます。結果としてある・なしが見られますが、何によるのかと言えば、意図的な選択かもしれませんし、結果的な現象かもしれませんし、一様ではないでしょう。交流は、あるいは「社会的な選択としての側面」を持っているように思います。

well-being という、われわれの主題に立ち戻ってみましょう。well-being は身体、精神および社会的に良好な状態とされています。しかし考えてみますと、身体的、精神的、そして特に社会的な良好とは何なのでしょう。これは根本的な問いであり、well-being を考えるならこれを考えないわけにはいきません。そして well-being が達成できている状態であるというためには、この3領域の全部を満たさないといけないのでしょうか。一つや二つだけではどうでしょうか。もしも部分的な実現があるなら、三つの領域に優先順位をつけることはあるのでは

Table 2 Well-being の応用心理学的研究への示唆

介入実践として、関係形成のための環境作りは可能
ただし関係形成を選択する段階が必要
関係をどうしたいのかを考え関係があるとどうなるのかを知り、
関係を作りたいがきっかけがない場合に支援

- ・健康教育：知識—動機付け—決定—方法—実施—調整
- ・知識：活用例、希薄な場合の不都合、教育法や機会などの情報
- ・方法：環境調整、心理教育、イベントプログラムなど
- ・支援：個人の生き方スタイルの形成過程と自己実現
- ・困難：「マイナスの補正」としての修理・治療・医療モデルの明解さ
「プラスの上積み」としての心理教育モデルの複雑さ
価値生産のための方向性をどう定めるか

うか。選択的に扱うことはあるのでしょうか。例えばまず精神的なものを優先するとか、社会的なほうはとりあえず構わないでおくなどの、選択や方略があるのでしょうか。人によって別のものを大事にしたり、場面によって領域の効果が異なったりははどうでしょう。さらに3領域は互いに、これがこの目的になるとか、方略になるとか、結果になるといった相互関係があるのでしょうか。3領域の関係はどのように追求され、解明されればよいのか。仮に個人によって、この3領域のあり方に違いがあるのだとしたらどうなるでしょう。個人のスタイルを尊重して、個人の選択を支援しようと思ったら、その時には何をどうすることが望ましいのでしょうか。こういったことを、われわれは考えていかなければならないと思います。われわれは well-being という概念を立てることによって、良好さとか望ましさというものを目指す営みに形を与えてきました。その探求を進めていく過程で、良好さとか望ましいといったことは、実は価値判断を伴う目標だったのではないかと、ということに思い至るわけです。

最後に社会と文化のありようを視野に入れて関係を紡いでいく視点からの、well-being に関する応用心理学的な研究への示唆を、共有しておきたいと思えます。well-being を高める意図を持った介入実践として、関係形成のための環境作りを計画していくことは可能だと思います。ただし、その営みにゴーサインを出す前に、関係形成を選択する段階を挿入するのがよいと思えます。まずは当事者に、関係をどうしたいのかを考えてもらうということです。関係があるとどうなるのか、ないと何が困るのかあるいは不便なのか、そしてあると返って煩わしくなる可能性も、考えてもらうとよいでしょう。そのうえ

で、関係を作りたいけれどどうもきっかけがつかめない、という場合に、積極的に支援しようとするのが適切ではないかと思えます。参考になるのは、健康教育のモデルです。例えば、ダイエットしたいとか禁煙したいという場合に、まず知識を紹介し、動機づけを高めることから支援が始まります。本人の意志決定が行われた場合に初めて、具体的な方法が示され、計画を立てていきます。そして環境を作り、実施の状況を見て調整し、気持ちを支えながら、全体的に支援を進めていきます。われわれが見てきた関係作りという主題で考えていきますと、まずは関係を持つことの利点や活用例を伝えて、関係の持つ意味を知ってもらうことだと思えます。教育の方法や機会を工夫すれば、情報を知識の力に変えていけるでしょう。その方法として環境調整や心理教育、イベントプログラムなどが考えられるでしょう。支援の目標になるのは、個人の生き方やスタイルの形成過程であり、この意味で自己実現を支援するようなイメージだと思えます。難しいのは、価値の産出のための方向性をどう定めるかだと思われま。医療モデルの考え方を取れば、修理や治療という営みがマイナスの補正としての意味を持ち、目指すものは明快です。ここを埋めれば欠損が満たされる、これができるようになる、という見通しが立ちます。しかしプラスの上積みとしての心理教育モデルとなると、必要や効果の判断はより複雑になり、

悩ましさが増すと思います。したがって、well-beingを考えていくにあたっては、身体、精神および社会的に良好な状態ということの意味を考えていくという、そういう営みが求められていると思うものです。

ご静聴ありがとうございました。

引用文献

- Okunishi, Y., & Tanaka, T. 2013 Social skills and cross-cultural adaptation of international students in Japan. *Progress in Asian Social Psychology Series*, 8, 76-92.
- Yashima, T., & Tanaka, T. 2001 Roles of social support and social skills in the intercultural adjustment of Japanese adolescent sojourners in the USA. *Psychological Report*, 88, 1201-1210.
- 中野祥子・田中共子・奥西有理 2013 異文化接触場面における困難とその対処からみた在日ムスリム学生の異文化適応スタイル 多文化関係学会 2013 年度第 12 回年次大会.
- 田中共子・高濱 愛 2012 大学生における対人関係形成の困難に関する原因認知：高齢者、子ども、外国人、社会人、学生との関係について 文化共生学研究, 11, 35-44.
- Tanaka, T. 2013 Investigation of the social skills of the elderly to enhance relationship formulation with youth. *Progress in Asian Social Psychology Series*, Volume 9, "Towards Social Harmony: A New Mission of Asian Social Psychology", 51-72.

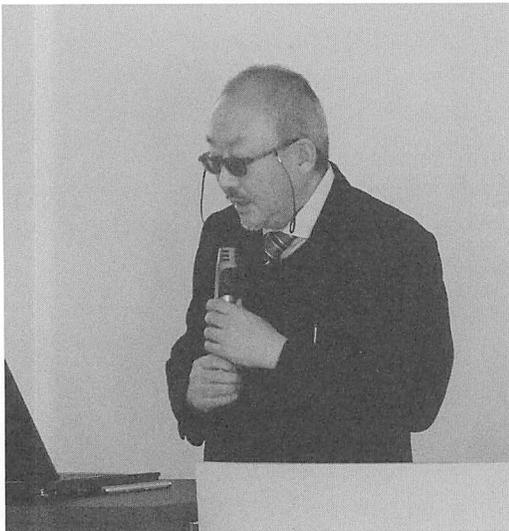
持続可能な well-being をどう目指すか

堀毛一也

(東洋大学社会学部)

ご紹介に預かりました、東洋大学の堀毛でございます。本日はお招きいただきましてありがとうございます。私は現在、日本応用心理学会の会員ではないのですが、以前は所属させていただいており、かなり前になります。岩手大学で開催された大会では発表もさせていただきました。その後また機会があるだろうと思っているうちに、会費をお支払いせずにいたもので、退会連絡が届きまして、その時から、まあ残念ながらご縁がなくなってしまうということで、全くお恥ずかしい次第です。今日はまたこういう形でお招きをいただきましたので、お許しただけなら改めて入会させていただこうかなと思っております。

さて、今日の話ですが、3人のメンバーの演題を見た時に、関連性がよくつかめず、大坊先生はどういうつながりを考えていらっしゃるのだろうと、何をお話しすればよいかとまどっていたのですが。今お二人の話を伺って、さすがにつながりを上手に作られているのだなと思えました。上出先生の話は、人間とロボットのインタラクション、要するに個人レベルでの well-being を、相互作用の中でいかに形作っていくかということをお話になられたように思います。田中先生は留学生の適応という問題を中心に、



堀毛一也先生

社会レベルでの well-being の重要性についてお話をなさったように思います。私はさらに大きな枠組みとして、環境と well-being との関連について話をさせていただきます。ということで、とり挙げるレベルの違いが上手くカバーされているように思います。

そこで、今日の話ですけれども、最初に well-being に関するポジティブ心理学的な研究やら、環境と well-being に関連する研究の話を少しさせていただいた後、現在私の進めている研究について話をさせていただきます。最初はポジティブ心理学に関するご紹介です。応用心理学会の中にも、ポジティブ心理学に関心を持つ方々はたくさんおられると思いますので、ごく簡単に話をさせていただきますと思いますが、ポジティブ心理学は、Seligman が 1998 年に APA の会長就任の際の講演で提唱した考え方です。実際には、Csikszentmihalyi & Nakamura (2011) によると、相当の準備をもとに提唱された方向性だったようです。Seligman 自身、学習性無気力の研究をやっている、その発想を逆転して、継続的な報酬が楽観的な認知につながるのではという考え方からポジティブ心理学の提唱に至ったようです。提唱後も、リゾート地の Akmal というところで、ポジティブ心理学のミーティングが何回も開かれて、どういう方向で発展させていったらいいか、例えばジャーナルを作らなくちゃいけない、ファンドを取らなくちゃいけない、若手の研究者を育てなければいけない、そういったことが論議されたようです。その当初から、研究領域として三つの領域(モード)が設定されていました。一つはポジティブな主観的経験に関するレベルで、研究の中心的テーマが well-being、リーダーは、ドクター・ハピネスと呼ばれる Diener です。二つめは、ポジティブな個人的特性で、Csikszentmihalyi が中心となって、フローやヒューマン・ストレンクスと呼ばれる研究がいろいろと行われるようになりました。そして三つめはポジティブな機構・制度、集団レベルで、Jamieson が中心になって進めたということが知られています。これらの研究の中でも、一番研究が進んでいるのは、モード 1、すなわち well-being に関する研究で、これがポジティブ心理学の研究の中心になってきたことは、間違いのない事実だと思います。先ほど田中先生のご発表の中にも、良さというものはいかかといった問いかけがありましたし、昔から哲学の中でも、良い人

生とは何かということが、いろいろと検討されてきました。上出先生のご論稿(上出, 2013)の中にも紹介されていますが、一番単純なのはヘドニスティックな考え方、快樂が楽しい人生だという考え方ですね。それに対して同時にその頃の古代ヘブライ人の中では、Divine command theory という、神の命に従って敬虔な生活を送ることが幸せな生活だと考える人々もいた。私はマレーシアでムスリム研究者とコンタクトがありますが、ムスリム的な well-being というのは何かという研究によれば、やはりこういう神の命に従って生きることが重要であるということが項目の一つとして入っていると思います。そして、ギリシャ時代になりまして、Aristotle によって強調されたのが、Eudaimonia という考え方で、これは六つほどの側面が挙げられているのですが、その中でも特にある活動に従事している時に感じる充実感とか、これこそが本当の自分だという感覚とか、well-being に関連するということが提唱されています。つまり、well-being の考え方に、昔から非常に多様な種類が含まれているということですね。中世は well-being 科学にとっても暗黒時代だったようですが、ルネサンス期に至り、創造活動が重視されるようになって、Utilitarianism (功利主義) という考え方が提唱された。これは、すべての人の幸せが、究極の目標で、個人の幸福感を最大にする社会が、理想の社会だという考え方ですね。そこから、Hedonic calculus という、ネガティブ経験とポジティブ経験の比、今日でいうと、PN 比と呼ばれるものですが、これが幸福に関連するといった主張が展開されました。こうした考え方の変遷は、Compton (2012) の中によくまとめられています。その中でもう一つ紹介されているのが、東洋における well-being の考え方です。例えば孔子は、仁・義・礼・智・信を兼ね備えた人が理想で、良い人生、理想な社会につながるような個人と社会が一体化した幸せを強調しました。また釈迦は、諸行無常、無我という、平常心、穏やかな心、悟りの境地、そういう穏やかな幸せを強調しています。これらの発想はやはり西洋にはない幸福感で、こうしたことに注目して、最近日本人の幸福感というものを検討しようとする、後でご紹介するような動きも出てきております。

先ほど大坊先生のご紹介の中にもありましたけれども、Diener のお弟子さんである Virginia 大学の

石先生が、幸福感研究の第一人者ですが、心理学評論に書かれた論文があります(大石・小宮, 2012)。それによると、心理学における本格的な幸せ研究は 1930 年代まで行われてこなかった。最初の研究は Hartmann (1934) による幸せの自己評価研究で、それ以来 60 年代の後半までは、行動主義の影響が大きくて、ほとんどそうした研究は行われなかったということらしいですね。そして、Wilson の 1967 年の review (Wilson, 1967)、これは幸福感や、subjective well-being と言い方をする概念、尺度や測定道具、幸福感の次元、幸福感の関連領域などを扱った review で、心理学的な幸福感研究のきっかけになったと論じておられます。さらにそれを発展させたのが、Diener (1984) の研究で、これは 256 の論文の review を行っている。しかし、その大半は社会学、老人学の研究で、心理学関連の論文はわずか 17 編だったというようなことも紹介されています。心理学が well-being に関心を持ち始めたのは、社会学、老人学などの領域に比べるとずっと新しい時代だということになります。そうした研究がポジティブ心理学の影響を受けて、急速にまどまりはじめた。特に Keyes et al. (2009) は、アメリカで大量のデータを集めながら、MIDUS というプロジェクトを立ち上げて研究を行ったのですが、その中で well-being を、少なくとも三つの側面に分けることができるという主張を展開しています。一つは感情的な well-being (EWB) ですね。これは陽性感情の高さ、陰性感情の低さ、あるいは先ほど言った hedonic balance、つまり、陽性感情が陰性感情よりも多い、あるいは比率として高いことが幸せということですね。二つめは心理的な well-being (PWB) です。これは Ryff (1989) を中心にして、六つの心理的側面が well-being にとって重要であるとする主張です。自分を受容できる(自己受容)、個人的に成長している、人生に目的がある、自分をとりまく環境が制御できている、さらに自律と積極的な対人関係、という六つです。さらに社会的 well-being という、社会的一体感、社会的貢献感、そして、社会的な統合感や社会的受容感、さらに社会的実現感、つまりコミュニティの中で、一人の人間として活躍できているという実感を意味します。この中で感情的 well-being や、心理的 well-being に関しては日本でもいろいろな研究がすでに行われていますが、社会的 well-being に関しては、残念ながらまだ研究

があまり進んでおりません。そういった意味で、田中先生のご指摘は大変貴重なもので、コミュニティレベルでの幸福感について、きちんとした尺度を作って検討していく必要があると思います。残念ながらこの社会的 well-being の尺度を翻訳して使ってみたのですけれども、日本では五つの因子に綺麗にまとまらないようです。やはり日本社会には、アメリカとは異なる性質があるのかもしれない。このあたりについては、また改めて検討してみたいと思っています。また、Keyes et al. は、これらの三つの側面のいずれにおいても高い well-being を示し、しかも過去において、とりわけ落ち込むような出来事を体験しないことを well-being の条件と考え。これフラリッシュ (flourishing: 活力感) と呼んでいます。それは、この図に示したように、well-being の三つの側面 (Emotional, Psychological, Social) が奥行きとして位置づけられて、それらがいずれも高く、しかも Mental illness が低いことがフラリッシュであると。同じように well-being が高くても Mental illness が高いと苦闘感 (struggling) が感じられ、well-being が低く Mental illness が高いと沈滞感 (floundering) と。そして低いと疲弊感 (languishing) になると (Figure 6)。そうした中で、フラリッシュを目指すべきであるとする主張が展開されているのですが。これまで落ち込むような側面がなく、そして三つの well-being が高いのは、何かすごく幸せな人であるとは思いますが、困難や逆境を乗り越えて、それぞれの well-being に至ることもとても大事なことのように思います。

さらに最近では昨年亡くなられた Peterson や Seligman が、EWB, PWB に加えて engagement とい

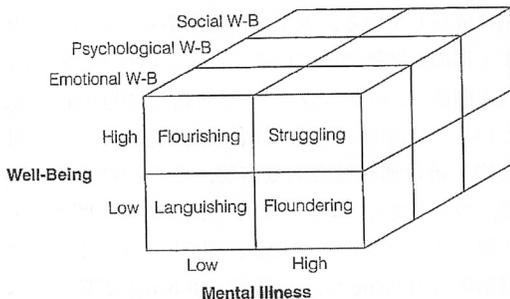


Figure 6 Keyes et al. による well-being と mental health の関連 (Keyes et al., 2009)

う活動への関心も SWB の重要な側面として考えることができると主張しています。これは Csikszentmihalyi のフローの考え方の影響を受けているようですが、一生懸命取り組むことのできる活動があることも幸せの一つの条件だと。これを「幸せの三つの志向性」と呼んで、その測定道具も作成しているのですが (Peterson et al., 2005), 日本でもこれを熊野先生が翻訳しておられますね (熊野, 2011)。さらに、Seligman (2013) は、三つの志向性に加え、自尊心、楽観性、レジリエンス、活力、自己決定、ポジティブな関係性を付加的な要素として、フラリッシュを考えていくべきだと主張していますし、こないだ来日された Caprara もですね、ポジティビティについて、いくつかの側面を統合して考えるということの重要性を指摘しておられます (Caprara et al., 2012)。このように、well-being という考え方そのものに、非常に多様な側面があるというわけで、いろいろな研究をやる時に、どのような指標を使って well-being を捉えようとしているのか、注意をはらって見ていかなければいけないと思います。

日本的な幸福感としても、菅先生、唐沢先生、北山先生が、ミニマリスト幸福感という考え方を提唱なさっています (Kan et al., 2009)。これは平穩、つまり穏やかな気持ちでいられるということや、調和という気持ちを幸福感として重視しています。穏やかな気持ちでいられるということは、今回の震災からの回復にとっても、非常に重要なポイントになっていると思います。大変な逆境があったとしても、それを穏やかに受け止めることができるということですね。それが幸福として、何も変わったことがないことの幸せというのでしょうか、そうした感覚が、日本人にとってはとても大事な側面なのではないかという感じが致します。

さて、前置きが長くなりましたけれども、ここからですね、もう一つ広い視点から well-being を考えることができるのではないかということについてお話ししたいと思います。応用心理学会の先生方の中には、環境心理学をご専門とされる方々が沢山いらっしゃって、今さら何を言っているのと、お叱りを受けそうですが、私、環境心理学の専門でもないのです。そこは勘弁していただいて、お話をさせていただきたいと思います。ここでお話ししたいのは、持続可能な well-being ということです。たとえば、O'Brien

(2008)は、sustainable happinessという考え方を主張しています。これはどういう文脈から出てきているかという点、サステナビリティ（持続可能性）に関する研究が、2000年代にはいって非常に盛んになってきたわけですが。それを受けて、その場限りの幸福感の追究は、環境破壊とか、環境劣化の原因になるのではないかということを描いているわけですね。そこから、他者、環境、将来の世代に負担をかけずに幸福を追求することが大事なのではないかという考えが生じ、これをsustainable happinessという言い方で呼んでいるわけです。さらにKjell (2011)は、個人のwell-beingを他のさまざまなシステムとの関連の中で捉えたいという考えで、バランスのとれた全体的な適応過程として把握することをsustainable well-beingとして重視しています。もちろん環境ということを含めての話です。これらの指摘の背景にあるのは先ほども言いましたが、サステナビリティ、持続可能性というような考え方で、人間活動、特に文明の利器を用いた活動が将来に渡って持続できるかどうかを表す概念として定義されています。ご存じのとおり、さまざまな国際的な委員会の中で論議が重ねられ、なかなか調整がつかないものの、その研究が進んできているということです。日本でもサステナビリティ学連携研究機構が設立され、東京大学を中心にいろいろと研究が進んでいるようですが、残念ながら心理学の関与はあまりないようです。東洋大学も支援機構としてこの組織の中に入っていて、エコ・フィロソフィというサステナビリティを哲学的視点から検討する機構を作っていますが、なかなか連携した研究が進まないように思います。

そうした中で、心理学的研究としては、メキシコの研究者ですが、Corral-Verdugo et al. (2010)がサステナビリティに対する心理学的なアプローチを提唱しています。“Psychological Approaches to Sustainability”という本ですが、この中で心理的な次元として以下の四つの側面が強調されています。一つは「向環境的な心性」ですね。これは要するに、個人を向社会的・向環境的に行動させる認知、態度、動機、信念、規範、価値、知識、スキルなどを意味します。第2は、「Sustainableな行動」です。これは、地球上の社会-物理的資源全体を保護する目的を持った向環境的、愛他的、節約的、公正な行動を

意味します。第3点は、「文脈的要因」で、気候、技術、資源の有無などの物理的要因と、社会規範、法律、集团的価値、宗教などの社会的要因が含まれます。最後は「結果変数」として、向環境的行動の結果として生じる、生態的、経済的、社会的、組織的なポジティブ効果や、幸福感、心理的回復などの成果があげられています。ただ、こういう「結果」まで含めてサステナビリティを考えていいのか、ちょっと疑問は残ります。一方で環境心理学領域でも、環境心理学の大家であるProshanskyとか、Stokolsとかもすでに環境心理学的アイデンティの混乱を描いていたようですが、その新たな方向性の一つとして、Sustainabilityの重視という立場が出てきたように思います。例えばBechetal & Churchman (2002)は、environmental psychology of sustainable developmentという考え方を主張しています。また、Gifford (2007)も環境心理学がsustainabilityの環境心理学へと進化しつつあると述べています。どちらも環境心理学の大家なので、こうした動向は環境心理学全体に見られる動向と見てよろしいように思います。APAの中にも、環境心理系のブランチが二つあるようですが、その中のDivision 34というところでは、Society for population and environmental psychologyという名称が、会員の投票によってSociety for environment, population and conservation psychologyと変わったようです。つまり、conservationという側面を強くしようとする動向ですね。このきっかけを作ったひとりがClaytonという先生で“Conservation Psychology (Clayton & Meyers, 2009)”とか、“The Oxford Handbook of Environmental and Conservation Psychology (Clayton, 2012)”といった著作をまとめておられます。宣伝になりますけれども、この方を招聘し2014年の3月16日に東洋大でお話をいただけることになっています。京大でもお話をさせていただける予定ですので、関心のある方は是非おいでいただければありがたいと存じます。ではその保護心理学というのは何かというと、人間と自然の相互関係について理解を深めるとともに、両者の健全で持続可能な関係を促進することを目的とした心理学とされています。その目的の一つとして、人間のwell-beingの促進が含まれているということです。つまり保護心理学は、サステナビリティという目標に向けて、さまざまな直接的で綿密な研究を行い、その研

研究成果をもとに環境保護を中心とした科学技術への提言を行うという位置づけを持った心理学として提唱されているわけです。研究テーマとしては、環境心理学と重なりがあることにもなりますが、自然環境に対する態度、認知、価値、倫理、道徳、自然に対する親和感、自然環境に対する責任感などで、動物と人間の関係性なども一つの特徴になっているテーマだと思えます。それから環境管理ですね。自然保護、生物保護は当然ですが、その一つとしてサステナブルな行動の促進がとり挙げられています。そして生物多様性の保護、環境教育への展開、それらを内容とする領域を保護心理学と呼んでいるわけです。実は、このような動向とポジティブ心理学は深い関係にありまして、昨年開催された WCPP (国際ポジティブ心理学会) にも、先に紹介した著作の共著者の Myers 先生がいらっしやいまして、McMillan という臨床心理学の先生と共同で Pre-congress で保護心理学の話をなさいました。ここでは、ポジティブ心理学と保護心理学の関連性を三つの側面から解説していました。一つは実践的な側面として、sustainable な人間のフラリッシュ感を考える時には、自然との良い関係のあり方を考慮すべきだということ、2 番目は理論的な側面として、やはり well-being を考える際には、自然との関連性をきちんと理論的に説明すべきではないかということ。3 番目はメタ理論的な話ですけれども、人間の自己イメージやアイデンティティについても、保護心理学とポジティブ心理学の融合ということから考えていくべきではないかということです。今回の会議は第 3 回になりますが、テーマとしてもポジティブな環境作りということが掲げられていて、これがポジティブ心理学の一つの重要な側面と捉えられていて、大変興味深い研究発表がありました。今までポジティブ心理学の中では、特に個人の well-being とか、特性といった側面の研究はたくさん行われてきたのですが、先にご紹介した第 3 の側面、つまり制度、集団、環境ということについての研究は、あまり進められてこなかったという印象があるので、これをきっかけとしてその種の研究の多様な展開が見られる可能性があると思えます。

さて、だいふ時間を使ってしまいました。残り若干の時間をいただいて、私自身がやっている研究についても少し紹介をさせていただきたいと思いま

す。この研究はサステナブルな心性の検討を人類全体の幸せに通じる研究課題として位置づけ、特に私はポジティブ心理学やパーソナリティ研究を自分の課題として捉えておりますので、ポジティブ心理学的観点を背景としながら、サステナブルな心性の発見・促進ツールを開発し、それによって個々人のサステナブルな行動の促進につなげたいという発想で行っているものです。こうした向環境行動の促進については、最近多くの先生方が関心をお持ちだと思いますが、私自身もこれまで 3 回にわたり報告を行ってきました。一つは、マレーシアで行われた国際平和心理学のシンポジウムで発表させていただき (Horike, 2013a)、2 番目は先ほど紹介したポジティブ心理学の国際会議で発表を行いました (Horike, 2013b)。そして最後は、2013 年度の社会心理学会で発表したものです (堀毛, 2013)。ここでは、その三つのデータについて、簡単にお話したいと思います。まず平和心理学の会議で発表させていただいたものでは、予備的なサステナブルな心性尺度・行動尺度ですね。それと well-being との関連ということで、先ほどご紹介申し上げたさまざまな側面との関連を検討しました。Table 3 はそれらの well-being 指標に関する因子分析結果です。一番上にある PWB が、心理的な well-being の側面。それから 2 番目の minimalist が、日本的な幸福感。そして Keyes のメンタルヘルスの尺度で、この中には社会的、well-being の側面も含まれています。それから、Diener の SWLS、最後は Lyubomirsky の SHS (幸福感尺度) です。2 次因子分析の結果 (Table 3) は三つの側面に分かれるのですが、最初の側面は、SWLS などを含む一般的な well-being、それから 2 番目の側面が個人的成長感や積極的対人関係と日本的な幸福感、3 番目が人生目的感と自律ということになりました。そのうえで、サステナブルな心性から行動と well-being、行動から well-being というパスを仮定して共分散構造分析を行いました。

Figure 7 は、well-being として先ほどの第 1 因子について検討を行った結果です。注目していただきたいのは、サステナブルな心性と行動の間には強いつながりがあり、また心性と SWB の間にも強いつながりがありますが、行動と SWB の間のパスは低いということですね。Well-being の指標を第 2 因子に替えるともっと心性とのつながりが強くなります

Table 3 well-being に関する諸指標の 2 次因子分析結果

PWB (Ryff)	self acceptance	0.713	0.059	0.119
	environment control	0.483	0.231	0.111
	personal growth	-0.261	0.850	0.190
	autonomy	-0.039	-0.065	0.664
	life purpose	0.184	0.039	0.695
	positive relationships	0.123	0.402	0.175
	Minimalist (Kan et al.)	gratitude	0.299	0.568
	in-situ	0.624	0.248	-0.122
	calmness	0.109	0.527	-0.374
Keyes	MHC-SF	0.678	0.091	-0.082
Diener	SWLS	0.944	-0.303	0.000
Lyubomirsky	SHS	0.616	0.074	0.162

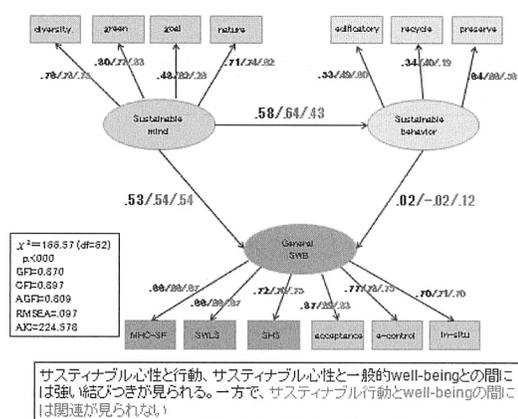


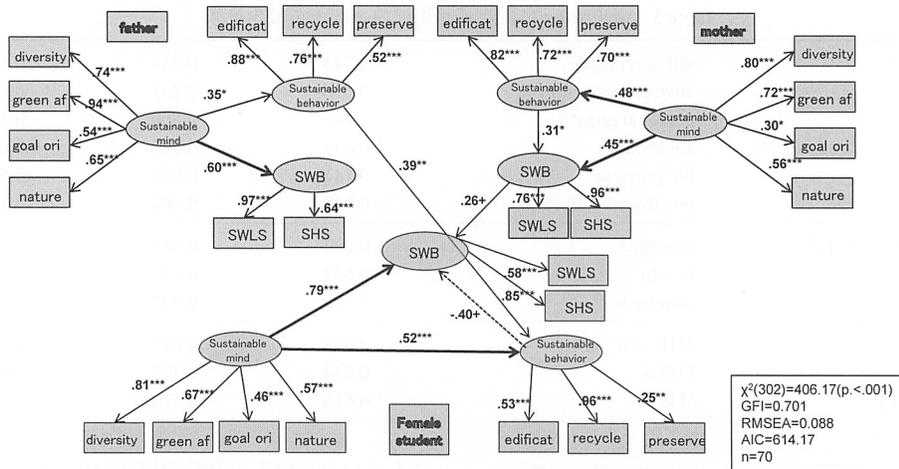
Figure 7 共分散構造分析によるサステイナブル心性・行動と well-being の関連

(パス係数=.82)。しかしここでも、行動とのつながりは出てきません。つまり、サステイナブルな心性の高さは、行動と well-being のつながりには反映されないということになりますね。ただ、心性を高めることが、サステイナブルな行動の促進につながることは示唆されています。なので、サステイナブルな行動を行うことをどう well-being の高まりに反映させるかということが重要な研究課題であるということになります。

次に、ポジティブ心理学の国際学会で発表したものですが、このデータは、学生とご両親双方から得られたデータの分析です。学生の性ごとに、父親・母親および学生のサステイナブル心性・行動と well-being (SWLS と SHS を使用)、およびそれらの関連性を検討しました。ちょっと複雑な図式ですが、親のサステイナブルな考え方が子どもの行動に影響するかどうかというようなことを調べたくて調査を行いました。

こちらは女子学生の共分散構造分析の結果です。父親の sustainable behavior から、学生の sustainable behavior, また母親の well-being と学生の well-being には多少の関連があります。しかし、他の側面に関しては全く関連が見られません。また、男子学生になると全く関連が消えてしまいます。つまり全般的には、親と子の sustainable な行動や、心性、そして well-being にはつながりがないということが明らかになりました。したがって、やや拡大解釈かもしれませんが、教育可能性として、単純に家庭で担っている教育の中で、こういう sustainable な行動の促進を考えていくのは難しいということが結論として言えるのではないかと思います。

もう一つ最後にご紹介するのは、日本社会心理学会第 54 回大会で発表させていただいた心性尺度の改訂に関する報告です。これまで心性尺度については 4 因子解を用いてきたのですが、内容的にどうもいろいろと重要な側面が落ちているように思いますし、特に先にご紹介した最近の知見が取り込まれていないと感じたのもので、尺度の改訂を試みました。また妥当性の指標として Milfont (2010) の向環境的態度と、佐古他 (2002) の環境問題評価尺度を用いました。そうすると、時間がありませんので詳細は省略させていただきますが、心性因子として世代継承性、持続的環境への関心、生物多様性の関心、判断の公正性、環境親和感、さらに、環境問題解決への関心。環境問題への否定的な態度、社会的多様性への関心という因子が得られ、それと並んでサステイナブル well-being という因子が、2 項目ですけれども、一つの因子を構成するという結果が得られました。この具体的な内容としては、「環境や将来



女子学生では、父親のサステイナブル行動が学生の行動にポジティブな影響を与えている可能性がある。心性間の影響はみられない

Figure 8 父親・母親および学生（女子）のサステイナブル心性・行動，および well-being の関連

の世代に負担をかけずに、幸福を追求することは重要だ」, 「次世代のニーズを危うくしないことを心がけながら自世代のニーズを解決する必要がある」という項目です。これを含めて九つの因子は、サステイナブルな心性の代表として妥当ではないかと判断できる因子のように思います。これを実際に世代別でとってみますと、日常への関心に関連する内容は親世代で高く、知識・判断は学生が高いという結果が出てきました。同様に行動尺度についても、12因子解が妥当な解として得られ、これについても世代による分散分析を行ってみると、全般に学生世代よりも親世代、男性よりも女性のほうがサステイナブル行動を行う傾向が高いことが示されました。さらに心性面から見ると、環境親和感と行動の諸側面の相関が高いこと、また判断の公正性や否定的態度と行動との相関は全般に低いことが示され、行動面から見ると、環境配慮行動や、節電行動と心性との相関が高いことが明らかになりました。結果的に心性と行動の相関は因子ごとに異なるので、そこから考えられることは、行動のトレーニングによって異なる心性を促進できるとか、心性のトレーニングによって異なる行動を促進できる可能性があるということです。ちなみに、心性尺度と向環境尺度や環境問題評価尺度との間には中程度の相関があり、妥当性も確認されています。また向環境尺度の因子を含めて2次因子分析をやってみますと、心性尺度と向

環境尺度はおおむね異なる因子を構成することが示されました。こうした結果から、心性・行動尺度は、弁別的妥当性、併存的妥当性、ともに高いということが示されたように思います。そういうわけで、なんとかサステイナビリティな心性や行動を測定する、サステイナブル well-being を測定することも含めた尺度ができたと思います。保護心理学的な研究は、まだ日本ではほとんど行われていないようなので、そういった研究でも利用可能ではないかと思いますが、この尺度をもとに再度 well-being との関連を検討していきたいと思っています。ただこの研究の本来の目的は、先にご紹介したように介入研究というようなところにありますので、サステイナブル行動の優れた点、劣っている点をフィードバックして、ある程度の期間それを意識して行動してもらい、それによってサステイナビリティの促進傾向が見られるかどうか検討するといった研究も行う予定です。要するに、何が言いたいかということ、こうした試みを通じて、大事なのは個々人のサステイナブル行動を促進することだということです。そういう方向に向けた研究ができれば、それが人々のさまざまな well-being とのつながりを検討する基盤になるのではないかと思います。そのためには、応用心理学をはじめ、さまざまな分野との学際的協力が必要ではないかと思っています。どうぞご静聴ありがとうございました。

引用文献

- Bechtel, R. B., & Churchman, A. (Eds.) 2002 *Handbook of Environmental Psychology*. John Wiley & Sons.
- Caprara, G. V., Alessandri, G., Eisenberg, N., Kupfer, A., Steca, P., Caprara, M., Yamaguchi, S., & Fukuzawa, A. 2012 The positivity scale. *Psychological Assessment*, **24**(3), 701-712.
- Clayton, S. D. 2012 *The Oxford Handbook of Environmental and Conservation Psychology*. Oxford U.P.
- Clayton, S. D., & Myers, G. 2009 *Conservation Psychology: Understanding and Promoting Human Care for Nature*. Wiley-Blackwell.
- Compton, W. C., & Hoffman, E. 2012 *Positive Psychology: The Science of Happiness and Flourishing* (2nd ed.). Wadsworth.
- Corral-Verdugo, V., Garcia-Cadena, C. H., & Frias-Armenta, M. 2010 *Psychological Approaches to Sustainability: Current trends in theory, research and applications*. Nova Science Publishers.
- Csikszentmihalyi, M., & Nakamura, J. 2011 Positive Psychology: Where did it come from, where is it going. In Sheldon, K. M., Kashdan, T. B., & Steger, M. F. (Eds.), *Designing Positive Psychology*. Oxford U.P.
- Diener, E. 1984 Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, **95**(3), 542-575.
- Gifford, R. 2007 Environmental psychology and sustainable development: Expansion, maturation, and challenges. *Journal of Social Issues*, **63**(1), 199-212.
- Hartmann, G. W. 1934 Personality traits associated with variations in happiness. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **29**, 202-212.
- Horike, K. 2013a Towards the psychology for the sustainable well-being. 13th International Symposium on the Contributions of Psychology to Peace.
- Horike, K. 2013b A cross-generational study on the relationships among sustainable mind, behavior, and well-being. The 3rd World Congress on Positive Psychology.
- 堀毛一也 2013 サステイナブルな心性・行動尺度の再検討 日本社会心理学会第 54 回大会.
- 上出寛子 2013 主観的 well-being 二宮克美他 (編) パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版.
- Kan, C., Karasawa, M., & Kitayama, S. 2009 Minimalist in style: Self, identity, and well-being in Japan. *Self and Identity*, **8**, 300-317.
- Keyes, C. 2009 Towards a science of mental health. In Snyder, C. R., & Lopez, S. J. (Eds.), *Oxford Handbook of Positive Psychology*. Oxford U. P.
- Kjell, O. N. E. 2011 Sustainable well-being: A potential synergy between sustainability and well-being research. *Review of General Psychology*, **15**(3), 255-266.
- 熊野道子 2011 日本人における幸せへの 3 志向性—快楽・意味・没頭志向性— 心理学研究, **81**(6), 619-624.
- Milfont, T. L., & Duckitt, J. 2010 The environmental attitudes inventory: A valid and reliable measure to assess the structure of environmental attitudes. *Journal of Environmental Psychology*, **30**, 80-94.
- O'Brien, C. 2008 Sustainable happiness: How happiness studies can contribute to a more sustainable future. *Canadian Psychology*, **49**(4), 289-295.
- 大石繁宏・小宮あすか 2012 幸せの文化比較は可能か? 心理学評論, **55**(1), 6-21.
- Pererson, C., Park, N., & Seligman, M. E. P. 2005 Orientations to happiness and life satisfaction: The full life versus the empty life. *Journal of Happiness Studies*, **6**, 25-41.
- Ryff, C. D. 1989 Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069-1081.
- 佐古順彦・平田乃美・Gifford, R. 2002 環境問題に対する態度の測定: EAI の日本語版の検討 環境教育, **11**(2), 3-14,
- Seligman, M. E. P. 2013 *Flourish: A Visionary New Understanding of Happiness and Well-being*. Free Press.
- Wilson, W. 1967 Correlates of happiness, *Psychological Bulletin*, **67**, 294-306.

■指定討論

被災者と日本人の well-being をどう考えるか

藤森立男

(横浜国立大学大学院国際社会科学研究院)

本日の well-being の心理学に関する 3 先生の話題提供は非常にレベルの高いものになっておりまして、指定討論者としてついていくのが大変な状況でございます。最初に話題提供されました上出先生のお話は、ロボットと人間との新しい関係創出に向けた研究と理解しました。また、田中先生の場合には、日本人と外国人の異文化接触、あるいは異文化適応がテーマであったというように思いました。そして最後、堀毛先生ですけれども、well-being の持続可能性について検討されています。特に心性と行動の面から検討されており、well-being の未来について研究されていると理解しております。

今回は、東京未来大学の大方先生にシンポジウムの企画をお願いしましたが、適切な指定討論者がうまく決まりませんでしたので、藤森が指定討論者ということでコメントさせていただくことになりました。ただ、well-being については本格的な研究をしておりません。私が行っています研究の一つに well-being に近いものがございますので、それとの関連でご質問させていただきたいと思っております。私の研究の一つに原発事故で避難している被災者のメンタルヘルスに関する研究がございます。会津若松市に建設されている仮設住宅に福島県大熊町の被災者が避難しています。それから大熊町の被災者を受け入れている会津若松市の市民にも協力していただきまして、生きがい、生活満足度、精神健康などに

ついて両者を比較研究しています。大熊町は現在でも非常に放射線量が高く、立ち入りが制限されている地域に指定されています。大熊町は事故のあった原子力発電所から 10 km 圏内にありますので、97% が立ち入ることができない場所となっています。一方、会津若松市は大熊町から西方に約 100 km 離れたところに位置しています。文部科学省が提供している放射線汚染地図がありますが、この汚染状況を見ますと、10 年以上帰還できないだろうと言われています。

今年 8 月に、学生達 10 人とともに会津若松市に集団避難している大熊町の被災者と仮設住宅周辺に暮らす会津若松市民を対象にしまして、生きがい、生活満足度、生活ストレス、精神健康などについて調べています。精神健康の尺度は GHQ28 (General Health Questionnaire28) を使っています。GHQ28 は大方郁夫先生達が開発しました精神健康調査票と呼ばれるものです。今から 22 年前になりますが、私は北海道教育大学に勤務していました。1993 年に北海道南西沖地震が発生し、奥尻島を中心に大津波に襲われ、甚大な被害をもたらしました。私は被災者の精神的ダメージについて調査する必要があると考え、GHQ28 を使用することにしました。その時、GHQ の日本語版開発者が大方先生達でしたので、大方先生に電話をかけまして、これを無料で使用させていただきたいとお願いしました。大方先生からは「いいですよ」という好意的な返事をいただきました。その時以来、私も大方先生には好意的な感情を持つようになっております。最近では科学研究補助費が取れるようになりましたので、GHQ の著作権侵害をすることのないように、どんどん GHQ28 を購入しています。

さて、本調査では大熊町の被災者 137 名、会津若松市民 105 名の協力を得ることができました。具体的な結果を見ますと、「生きがいを感じますか」という質問に対して、大熊町の被災者は 4.4% が「感じる」、「やや感じる」が 18.3% で、合わせますと生きがいを感じている人は 2 割強 (22.7%) に留まっています。ですから、8 割弱 (77.3%) が生きがいを感じないという結果でした。これに対して、会津若松市民は生きがいを「感じる」は 27.6%、「やや感じる」は 47.6% で、これらを合わせますと 75.2% が生きがいを感じるということで、4 人に 3 人までが



指定討論 藤森立男先生

生きがいを感じているという結果でした。次に、生活満足度ですが、大熊町の被災者は「満足している」が2.9%、「やや満足している」が19.9%で、こちらも生活に満足している人は2割強(22.8%)に留まっています。しかし、会津若松市民は「満足している」が27.6%、「やや満足」が52.4%で、会津若松市民は80.0%が満足していました。この生活満足に関しては内閣府世論調査があり、今年度の結果を見ますと、「満足」は10.3%、「まあ満足」は60.7%となっており、これらを合わせますと71.0%が生活に満足しているという結果でした。会津若松市民と全国調査では7割から8割の高い満足率が得られていたのです。しかし、大熊町の被災者達は2割強に過ぎませんでした。生活ストレスの結果に関してはカットさせていただいて、精神健康の問題に移ります。精神健康上の問題について分析したところ(Figure 9)、78.4%の多数の人々が精神的問題を抱えているという結果になっていました。先ほどの堀毛先生の研究で、Keyes, et al. (2009)のメンタルモデルに関する研究のご紹介がありましたけれども、被災者の多くは「沈滞」のフェーズに陥っていると考えました。

Figure 10は、先ほどの内閣府が毎年行っている生活満足度に関する推移をまとめ直して作図したもののなのですが、2004年から今年度分までをプロットしてみますと、全体として日本人の生活満足度は高まる傾向を示しています。日本人はどうやら毎日の生活に満足している人が増加する傾向にあります。

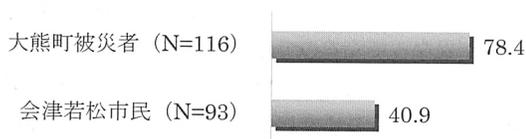


Figure 9 ハイリスク者の比率 (%)

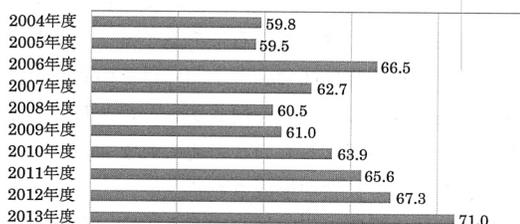


Figure 10 主観的満足度の推移 (内閣府, 2013)

しかし、大熊町の被災者を見ますと、生活の場を奪われてしまう、人と人とのつながりを切られてしまう、さらには地域文化から切り離されてしまう、そういうことがありますので、生きるこの意味や人生の充実感(well-being)を感じるできない状態になっているのです。このため、被災者の内面に配慮するような復興対策を講じるべきではないかと私は考え、社会に提言しているところです。

ところで、本日のwell-beingの心理学と関連づけてお話ししますと、日本人全体は満足度が高まっています。しかし別の研究、例えばOECD(Organization for Economic Co-operation and Development: 経済協力開発機構)が今年発表している満足度に関する国別の平均値(最悪が0点で、最高が10点)の結果を見ますと、OECD加盟国34カ国にブラジルとロシア入れた36カ国のなかで、日本は27位になっています。韓国よりも満足度が低いという結果です。満足度の高い国は、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、フィンランドなどの北欧ですね、社会福祉の充実した地域です。逆に、非常に不満だという国はハンガリー、ポルトガル、ギリシャですね。これらの経済的に行き詰っている国々の国民は非常に低い評価となっています。ただ経済的に恵まれないと不満かというところでもありません。最高点を出しているのはチリだからです。必ずしも経済がすべてではないということの意味しています。

話題提供されました3名の先生に私が疑問に思っている点を述べますと、こうした日本人の満足度というのは国内の調査では高く出ているようにも見えますが、国際比較で見ますと、必ずしも高くはないという結果になっています。これはどうしてでしょうかというのが私の質問です。日本文化の影響とか、日本社会の影響がここに反映されているのでしょうか。例えば、日本人はほどほどの幸せがいいのだというお話が、先ほど堀毛先生からございました。あまり感情を表にストレートに表さない国民性なのか、あるいは満足度そのものの捉え方が違うのでしょうか。あるいは地域社会の人間関係の希薄化が影響しているのでしょうか。さらには日本人の信仰心に問題があるのでしょうか。日本人の信仰心は総体としては薄い傾向にあるように感じます。なかには強い信仰心をお持ちの方もいらっしゃると思いますが、総体として信仰心は薄いのかとも思います。この

ような問題との関連で日本人の満足度をどのように考えたらいのでしょうか。非常に大きなテーマですが、私はこんなことを疑問に思いました。大坊先生からは、恐らくもっと具体的な質問が出るのではないかと考えております。それでは大坊先生、指定討論をよろしくお願いします。

個人にとっての well-being の社会化を目指す

大坊郁夫

(東京未来大学)

上出先生へのコメントとしては、人対ロボットの関係で今日お話しされました、そのロボットの形態、その用途が非常に重要な影響を与えることが示されました。それに加えて、どのようなロボットであれ、その背景に開発者、あるいは相互作用する対象者として必ず人がいます。ロボットにはまだまだオートノミーがあるものとは思えません。そうするとどのような場面にロボットが位置づけられるのか、どのような社会的な意味づけがなされているのかということも含めて関わりを持つ人を明示する必要がありますと思います。

近代以降、生活環境は、人とモノのあり方が大きく変化してきたと言えます。使い手である人、限定された道具としてモノという関係が次第に不鮮明になってきた。われわれの住む環境自体の中に、高度なインテリジェントを持ったモノが組み込まれつつあるという、人とモノとの混在化、境界自体が不鮮明になってきています。例として、携帯電話、タブレット端末、各種の自動応答システム、さらに、ア

ンビエント環境がある。さらに、協働者としての人手が、人工的な人手としてのロボット、生産を担う産業ロボット、介護ロボットなどのサービスロボットへと推移しつつあることも挙げられます。上出先生の発表では、ロボットの印象次元として、Human like の次元が示されていますが、このような「人」らしさを規定する必要があるとされている背景には、上記のように多様なロボットが活躍している現状の中で、ロボットが人に近似する、あるいは、少なくとも将来仲間としての位置づけを期待する心理性が回答者にも研究者にもあるのではないのでしょうか。あるいは、これまでのロボット像から、「人」近似のイメージが何故かクローズアップされる場所がある（それ自体興味深いことですが）からなのではないかと思えます。

人とロボットとの関係だけではなく、人とロボット（そこにいる人）との関係になっているという視点が必要ではないか。それは広い意味では「状況」になると思います。それからもう1点はですね、相互作用の形態、ロボットそのものがどこで—これも状況になりますけれども—どのようなところに登場しているのか。さらに言うと、そのロボットはモノなのか装置なのか、擬人としてのモノなのか、あるいは何らかの作業を分担するモノとしてなのか、あるいは、さらにサロゲート、身代りのなヒューマン・ライクの人に「近いもの」（擬人）なのかという視点があっているのではないかということをご指摘させていただきます。別な視点からすると、社会的な諸活動の協働者として捉えるのか、社会構成員である仲間なのかということによっても、研究の仕方自体が異なってくるのではないのでしょうか。

田中先生のお話では、異質というものが交流の契機を生むということでした。異質を伴う人との交流、それは社会そのものです。コミュニケーションの目的はおのおのが保有する情報が異なっている、それを互いに補完する、つまり、一方の持てるものを互いに提供し、補い合うところにあると言うことができます。ある意味で社会心理学的にはその異質を認識するところから、それを何とかしたい、解消のモチベーションが高まるものと考えられます。その結果として一つの社会が形成される。

その際に、異質の何が他に向かう、向かわせるのか。多文化の共生は、どこまで求められるものなの



左：司会・指定討論 大坊郁夫、
右：指定討論 藤森立男

でしょうか？ 多文化、多価値観の共有とは果たして可能なのか、共有の意味は、理解なのか、融合なのかは重要な視点かと思えます。ともあれ、文化が異なると言うときに一般的にはどちらかがどちらかに合わせる、適応するものとして考えがちです。しかし、おそらくそれには限界があると考えられます。果たして異質は同質になれるのでしょうか？ 他文化に合わせるという一方向なことではなく、双方向の、すなわち、ダブルスインク的な視点が必要なのではないかと思えます。そういう意味では田中先生は、日本人の留学生、それから海外から来日する留学生と両方の問題を扱われている。その両方は、土地、国が違いますが、それぞれの双方向の働きかけ、双方が一体化することを目指すための視点について何かお考えを教えてください。すなわち、異質であることの「何」が他に向かわせるのか、その向かった先には、何らかの充足された状態が期待できる、それが well-being とも言えるのではないかと思えます。

堀毛先生からは、well-being、ポジティブ心理学の研究史を踏まえて、幅広く、多くの視点を示していただきました。その中で、特にサスティナビリティについて指摘されていました。well-being を損なわないためには、現在の持てるものを将来にわたり維持していくのか、そのためにはどうすべきなのかが重要とのことでした。

その視点は重要であることはわかりますが、本当にそれだけでいいのかと思えます。持続可能な well-being を目指すことはとても重要で欠かせないと思えます。ただし、どの時点からの持続なのか、過去は遡って変革できないですけれども、今日の well-being の状況、現状を維持することでいいのでしょうか。難事ではありますが、これ以上に社会の well-being を損なわないように、むしろ、現状以上に向上を目指すための変革が必要ではないかとも思えます。これは心理学一つの学問だけではなし難いとも思わざるをえません。どこから考えた方がいいのか、私に方策があるわけではありませんが追究すべき課題です。おそらく、持続可能な well-being を担う保護心理学の発想自体に含まれていますが、心理学に留まらない総合的な科学の創出が必要にも思えます。

それから、個人の幸福とすべての人の幸福の合理解を考えるべきであり、個々人が考えている幸福の

意味を再検討し、捉え直しも必要ではないかと思っています。幸福の位置づけ、意味づけの直しです。このことは文化が違えば、幸福の意味も異なるとの見解は少なからず示されています。多数派の幸福追求は少数派にとっては不幸を生み出しかねないのが現状ではないかと思っています。それはなにも合理的な解には至らない。堀毛先生のお話しに、Kan, Karasawa, & Kitayama (2009) の紹介がありましたが、このミニマムな幸福の考えはその例として挙げられます。個人責任、自己主張に範をおく西洋的な思想に対する東洋的な思想が背景にあります。そうすると幸福というもの、あるいは well-being 自体が文化によって違っているということをお前提として文化、個人を捉え直す必要があると言えます。では、われわれは、大方にとって満足できる well-being 状況にないと考えていますが、これをどう乗り越えていったらいいのでしょうか。

さらに、well-being 研究には、まだ多くの課題があります。Figure 11 の左側にありますように、先ずは現状の well-being の構造分析をして、要因の抽出をする。それから要因間の関係、その階層性の検討。次いで、要因として優先されるものはなにか、要因の重要度の把握を行う必要があります。さらには、因果関係の描出もなされなければならない。その先では、well-being をどう実現するのかが最も重要な論点です。このことは取りも直さず、本日の一番の主題でもあります。

これらはメトリックな研究が主になります。では、右側—やや事例的な研究として位置づけられます。well-being という概念自体なんら絶対的なことではなく、相対的な概念です。well-being が高まっている集団は、あるいは、その高い個人は、どのような特徴を持っているのか。そこから個人や集団の

- | | |
|----------------|-------------------|
| 1. 構造分析、要因の抽出 | 1. Well-being例を分析 |
| 2. 要因間の関係、階層化 | 2. 抽出要因の当てはめ |
| 3. 優先度(重要度)の把握 | 3. 因果関係の検証 |
| 4. 因果関係の描出 | 4. 階層レベルの確認 |
| 5. 期待像を提案 | |



Figure 11 well-being の心理学的研究の現状とこれからの課題

特徴としての要因が抽出されます。そうするとそこから、要因間の関係の把握、さらに因果関係の推定が可能になると考えられます。

そして、その階層レベルが本当にあるのかどうか。ではその先には何が期待されるのか。この図の下に示した「社会的」とあるのは、社会総体としての well-being のことです。社会の well-being を考えた時に、どのような行動をわれわれは考えるべきなのか。さらには結論的なことを踏まえるならば、私にとっては、未だあいまいで、表現し難いのですが、個人の well-being の総体というものが、社会の well-being と考えるならば、これは一種のユートピアとも言うべきことになります。その時に個人の well-being、主観的な well-being という概念だけでは議論が深まらないように思っています。一般的にはこの概念が主要な切り口になっています。もっと説明力のある概念が欲しいのです。これは心理学だけではできないかもしれない。容易には到達し難い理想を追いかけているということ自体の、心についての科学の宿命なのかもしれません。ある意味では、われわれが求めている、あるいは普段手にしている事柄の価値とか、将来にわたり求めるべきか否か一便利さの見直しについて—ということまで含めないといけないと思っています。そうでないと、いくらこの領域の研究が進むとしても要因抽出で終わってしまう可能性が高い。さらには、well-being を実現するためには何が必要なのであろうか、私は答えが出ず、悶々としています。そして、どうやって具体的に実践していったらいいのについてお聞きしたいと思っています。

さらに、個人の主観的 well-being がこれまで心理学のテーマとなってきましたが、同時に大事なものとして、「社会的 well-being」があると思います。個人の well-being はその個人の適応に大きく関わるものであり、その個人の持つ人生の目的と深く結びつきます。同時に、人は必ず何らかの社会的つながりのなかに生まれ、生活しています。属する集団や社会（各々の規範が重要）に影響を受け、かつ、影響を与えています。そう考えた際に、個人の（主観的）well-being の総和が社会的 well-being とは単純に決められないと思っています。おそらくその属する集団なりの構成員が同じ価値観を有するならば、このことはかなりの確度で成立するかも知れませんが、

現実には、個人の価値観は相応に分布するものであり、収束し難い。そうすると、社会的 well-being とは、実態のない、イデオロギカルな一種のユートピアなのではないでしょうか。実現できない理想なのではないでしょうか。一つには、生活の便利さと引き換えられてきた（失われてきた）ことは何であったのか、新たに得られたことは何であったのかを検証すべきことと思っています。この問題を考えること自体は持続可能で、価値あることであり、個々の研究を集積してこそ求められる基本的であり、応用的な実践ではないかと考えています。

■質疑応答

大坊: 先ほどいただいた質問、先生方ご覧いただいたでしょうか。では、その分も重なってもよろしいですから、どうぞどなたからどなたに対してでもよろしいですので、ご質問などをお願いいたします。先ほど出していただいたことも含めてでもいいですし、全く違うことでもよろしいです。ご質問などしてください。どうぞ、手を挙げていただければ幸いです。はい、お願いします。

近藤: 東京未来大学の近藤です。先生方、大変な興味深いお話ありがとうございました。私自身も、20年間ほどアメリカにおりまして、今から10年ぐらい前に帰ってきました。アメリカ、ニューヨークの方で学校に行ったり、仕事をしていました。最初学生だったようなこともありまして、田中先生がお話になったことに大変興味がありました。あの、日本からアメリカに行った学生の向こうでのスキルがまず重要になって、そして向こうの方々のサポートを受けて、向こうでの適応とか、満足感につながるというお話だったと思いますけど。本当に適応するためにはバイリンガルだけではなく、バイカルチュラルじゃないといけないということを、私自身もよく感じていました。田中先生が研究された中で、一番重要なスキルというのは、どのようなものなのでしょう。それを2,3お話聞かせていただけましたらと思います。

大坊: では後ほどお答えをまとめてお願いいたします。

ご質問いただいたことについては、最後にお3人の方からコメントいただきますので、その際に回答をお願いします。他にいかがでしょう。はい、お願

いします。

角山：同じく東京未来大学の角山ですけれども、上出先生におうかがいたします。上出先生のご発表というのは親和性というのが大きな中心になっていますね。私自身もロボットと言ったら、親和性、人間に近いというような、すぐ感じてしまいますけれども、そもそもなぜロボットについて親和性が問題になるのか、その点についての議論は、ご発表の中に入っていたと思いますけれども、機械というふうにと考えると、車とか、工作機械などがあって、それらについての親和性というと操作的な親和性というようなところが中心になると思います。しかし、ロボットとか、ヒューマノイドという、大坊先生の先ほどのコメントにも近いのかもしれませんが、求められる親和性とは、やはり人間らしさ、というようなことになるかと思えます。これは結局、最終的には人間を創るとか、限りなく人間に近づけるといふ視点から出てきている、そういう親和性を求めるということなのでしょう。ロボットではどのような意味での親和性なのかという、基本に立ち返った時に、なぜロボットに親和性を求めるのであろうかという点については、お話を聞いていて、なるほどと思う反面、やっぱり自分でわからないところが出てきてしまいました。あるいは、ご発表の中あったかと思いますが、ちょっと不勉強なものですから教えていただければと思います。よろしくお願ひします。

上出：はい、ありがとうございます。

大坊：あとで、お願いします。他にいかがでしょうか。どんなことでもよろしいです。せっかくですから、今日は正しく先端的な話題をたくさん提供していただいたと思っております。細かいことについては、私は後で個人的にお聴きしますので、どうぞ皆さんあったら、どうぞこの場でご質問ください。いかがでしょうか。

近藤：すいません。1人で二つ言っちゃったらすいませんでしたが、堀毛先生が膨大な量のインフォメーションを与えてくれたのですが、そのインフォメーションのもことになる尺度、心性尺度、行動尺度ということに関しては、もちろん説明する時間全くなかったと思います。簡単でよろしいですから作成について少し聞かせていただければと思います。

大坊：はい、わかりました。後ほどエッセンスをお願いします。他には、お願いします。

潮村：端的には田中先生がおっしゃっていた健康教育との類似性、あるいは相違点について、お尋ねしたいと思います。私自身も、自分の研究領域で少し現実に介入して、より個人々の適応、適応向上につながるような研究をいつかしたいとは思っているのですが、なかなかそれができない。田中先生が言いました健康教育と、今回ご発表なされたように、より異文化適応ができるようになるためにどのような技術、方法があるのか。それから他の先生方、もし時間があれば、先生方が思い描いていらっしゃる現実社会へのフィードバックするにはどのようなプログラムがあるのか、構想などがもしございましたら、先生方に教えていただけたらありがたいなと思います。よろしくお願ひします。

大坊：とても私も興味があるところでございます。はい、他いかがでしょうか。よろしいですか。まだ時間はあります。はい、北村先生お願いします。

北村：関西大学の北村と申します。興味深いお話をありがとうございました。上出先生に角山先生からの質問の続きのようなものなのです。人間らしさを感じるという、次元のお話の中で、経験という次元が一つありますね。経験という次元の中では感情を感じるというのがあります。感情に関心を持って、私は研究をしておりますものですから。そうしますと、ロボットに親和性を持たせる場合、割と感情的な反応、それは表情に表れたりしてするかと思えますが。感情的な反応っていうのは、やはり必要なものであるのか。それは、どういう意味で必要なのか、限りなく人間に近づけて、例えば飽きたとか、愉快とか、そういうことも含めて、いろいろな感情というものを装備したほうがいいのかどうか、その辺に関しての良いところと悪いところみたいなのがありましたら、お考えをぜひうかがいたいと思いました。よろしくお願ひします。

大坊：はい、ありがとうございました。ではそれぞれいただいたことを踏まえて、それから先ほどいただいた質問用紙のことも踏まえて、5分程度ぐらいで、要点をお願いしたいと思います。順番をお願いします。

上出：すみません。どうもありがとうございます。まず角山先生のご質問から答えさせていただきます。

たいと思います。ロボットに親和性が必要となる理由についてですが、人間の場合だと、今日のシンポジウムのタイトルにもありますように well-being といった適応概念がすでに設定されていると思います。例えば、堀毛先生がご説明して下さったような要素が大切になってきます。人間とロボットの関係を考えた場合には、必然的な適応概念というものがまだ設定できていないのが現状です。なので、今は研究者側がトップダウンに適応概念として、親和性というのを扱ってみたり、あるいは安心感に注目したりしています。そういうふうに適応概念を研究者レベルの方からさまざま提案していくようなことをしない限り、そもそも人間とロボットとの適応的な関係自体が研究できなくなってしまうので、そういうことを仮説的に設定しているという背景があります。将来的には、人間にとってどういうロボットが適応的なのかということの本格的に考えていかなくては いけません。また、今人間とロボットの関係について研究をしている中で、well-being の指標をどうして取っていないのかというと、まだ一般の家庭の中にロボットが入ってきている時代ではないので、人間の well-being に対するロボットからの影響は、ほぼゼロに近いというのが現状だからです。一時的なインタラクションの研究が中心で、長期的な関係についてはまだまだ研究がこれからという段階です。もうすこしロボットが日常生活に出現するような時代になれば、ロボットとの共存生活の中で well-being の研究ができるかと思いますが、現在では適応概念を仮説的に設定し、推測しながら実験を行っているのが現状です。

角山: それはすべて要するに、ヒューマノイド、最終的にはヒューマノイドを仮定した要素になるのでしょうか。つまり、お掃除ロボットとか、何とかロボットって先ほどのなんでしたでしょうか。

上出: はい、サービスロボット。

角山: 上出先生のところの。

上出: はい、リムメカニズム (アスタリスク) です。

角山: ええ。あのようなものやはり全部対象になるのか。つまり、これまでのロボットといった時には、すでに工場などで動いているいわば、ロボット工場などがあるわけですね。

上出: はい。

角山: そういふところのロボットっていうのは、先

生がおっしゃっているような親和性については、こっちに置いていい訳ですね。

上出: はい、リムメカの場合は親和性の必要性は特に前提にしています。

角山: 操作的な親和性だけだと思うのです。操作ができるかどうか。それはヒューマノイドだからそういうことになるのか。

上出: そうですね。背景を十分説明できていないのですが、確かに産業用ロボットの場合には、フェンスを周りに設けて、人は絶対立ち入らないといった安全基準が設定されています。ただ、人間の周りで動くようなサービスロボットに関しては、心理的な安心基準がないので、いろいろなパラメータを操作した研究をしている最中です。そこではヒューマノイドだからというよりも、もう少し広く、サービスロボット全体に向けて親和性や安心感について研究を進めているところですが、先生のおっしゃるとおり、どのように親和性を操作できるかが重要になってきます。

北村先生のご質問、どうもありがとうございます。感情が必要な人間性にとって、感情を埋め込むことによる良いことや悪いことはないのかというご質問なのですが、人間らしいロボットを作るうえにおいては、感情表現は必然というのが、ロボット工学の中でのかなり広い一般常識になっています。感情表現を抜きにして、親和性の高い、あるいは人間らしいロボットを作ることはできないということです。良いところというのはやはり、意思疎通がスムーズにいくということだと思います。悪いところというのは、例えば不気味の谷の例のように、人が嫌悪感を抱いてしまうケースもあるということです。大事なのは、大坊先生のご指摘にもありましたけど、状況を指定しておかなければいけないということで、状況が特定されないと適切な感情表現ができない場合があって、結局悪い成果につながってしまいます。今、ロボットのデモを社会場面で実施する時には、環境や状況を固定しています。例えばデパートのショーウィンドウの中にアンドロイドを置いて、マネキンの代わりに服を着せたり、販売員として活動させるという試みがされているのですが、そういった時には、どのような表情をすればよいのかはある程度すでに決まっています。そういう文脈を設定することで、悪いエフェクトを低減することはできる

と思います。どうもありがとうございました。

田中：六つの質問をいただきましたので、順番に一言ずつ答えていきたいと思います。一つめは、アメリカで必要になるソーシャルスキルの中で大事なものは何か、というお尋ねについてです。私はクロスカルチャルなソーシャルスキルについては、文化一般的なスキルと文化特定のスキルに分けて考えています。アメリカの文化特定のスキル、つまりアメリカならではのスキルの中で、最も重要になるのはおそらくアサーション、日本語では主張性だと思っています。岡山大学の私のところや一橋大学の共同研究者のところ、こうしたアメリカンソーシャルスキルの学習を扱っています。大学生向けの留学準備クラスという形で、異文化間教育を提供しています。

二つめに、異質さとwell-beingの関係についてです。これは2通りの考え方ができると思います。つまり魅力としての異質さ、それから乗り越えるべき障害としての異質さという視点です。魅力という意味では、自分の幅を広げるための、いわば付加価値の生産に視する異質さという側面があると思います。それから障害という意味では、異質さを乗り越えて、その先に展開する人と人とのつながりを求めるべきだと考えるなら、異質さは障害です。どうやって克服するのか、それには、注目している異質さ以外に、共通の目標を持ったり、共通している部分を大事にしたりするという方略が必要になるだろうと思います。

続いて三つめですが、同質性を目指すのかどうか、つまり文化的な同質性は目指すべきものなのかということについてです。これは受け入れ社会次第とお答えしたいと思います。あるいは理念論的な答と、ストラテジー選択としての答という、2通りで答えることもできます。理念論的には、何年先になるかわからないけれど、多様性がより許容される多文化の社会が欲しいですね、という答え方ができます。もう一つの、ストラテジー選択からの答えは、現世御利益的なものを求める観点からの発想です。例えば、今の日本でどういう暮らしをしたいのか、今のアメリカでどういう暮らしをしたいのかを考えた場合の、今からできるストラテジックなチョイスを支援するスタンスも可能だと思います。

四つめは、介入がどんなふうに行けるのかについ

てです。私の場合は、ソーシャルスキル学習という心理教育の手法を使っています。例えば、高齢者との接触の前に、お年寄りとのソーシャルスキルを学んでもらってから、接触の機会に出かけて行ってもらうなどです。異文化接触の前に、予習的に学習することもできます。なお学ぶ時期としては、接触の前でも最中でも後でも、それぞれに可能です。留学生を対象にしたスキル学習をやっていると、心理教育は、心理学者が世の中にインパクトを提供できる、有用なメソッドの一つだと感じます。ただ、臨床モデルと医療モデルの違いを認識することが必要です。教育モデルとしての特徴を押さえてやらないと、誤解を招くと思います。矯正ではなくて能力開発なのです。そこが本人の意思確認とかモチベーションの段階の挿入を丁寧にやるべきだ、という見方につながっていきます。

五つめに、日本国内で満足度の調査をするとどうも低い値が出る、ということについてです。これには、いろいろな解釈ができるでしょう。ただ私の意見としては、もっと比較文化的な研究をすべきではないだろうかと思っています。同じ項目を使えば国際比較になると考えてしまうと、いささかオプティミスティックな感触かなという気がします。今ではクロスカルチャルサイコロジーとか、インターナショナルトランスカルチャルサイコロジーとか、インディジェナスサイコロジーといった分野があります。幸福感とか満足感は、そもそもどんな構造になっているのかといったことを、もっと丁寧に見ていくとおもしろいのではないのでしょうか。文化の研究者からすれば、同じ内容を翻訳した項目だから一緒と見なしてしまうと、場合によってはいささか単純な扱いに感じられることがあります。

最後の六つめ、これは会場に配られた質問カードでいただいたもので、会場からのご発言にはなかった質問です。お年寄りと接触する現実の機会として、何回くらい接触すればいいのか、どれぐらいの量の接触をしたら教育的効果が出るのかについてです。直接測定したことはないのですが、何でも言えませんが、私どもの研究室で行った実験が、お答えのヒントになるかもしれません。お年寄りのボウリング大会のボランティアに行く学生さんを対象に、事前にお年寄りとの接触のソーシャルスキルを学んでから行ってもらったというものです(田中, 2010)。そうす

ると質のいい体験ができるようなのです。お年寄り
と接触して楽しかったとか、誉めてもらえたとか、
言ってくれます。肯定的な成功体験が、本人にとっ
て、その後を決める手掛かりになる可能性を感じま
した。高齢者との体験企画はいろいろとあるよう
ですが、とにかく行ってこいという、いわば放り込み
型がいいかどうかは、私にはちょっと結論は出せま
せん。しかし体験の質を高める、というのは接触の
効果を得るのにいい工夫ではないだろうか、と思っ
ています。効果は一律に回数や時間で決まるもの
ではないかもしれない、というのが私の感想です。
以上です。

引用文献

田中 共子 (2010) 高齢者との交流を促進するソーシャル
スキルの学習 (3)—大学生を対象としたボランティ
ア交流場面における介入実験— 日本健康心理学
会第 23 回大会。

大坊: はい、ありがとうございます。次に、堀毛
先生お願いします。

堀毛: 田中先生も上出先生もすごいですね。的確
にお答えいただいていると思います。わたくしはそれ
ほどスキルが高くないもので、ちょっと的はずれに
なってしまうかもしれません。まず、近藤先生から
いただいた質問ですけれども、尺度をどうやって
作ったかということですね。これは前任校で私が最
初にこの研究を始めた時に、学内に学生の環境研
究会や大学の環境委員会があって、そこに所属す
る学生達といろいろ話をしたり、環境行動につい
てのリストを作成したりいたしました。それが行動
尺度のベースになっております。ただ、やはりそれ
だけではダメだろうということで、心性というこ
とを考え始め、そのベースになったのは先ほどの
Corral-Verdugo の研究です。その中にいろい
ろな心性面の指摘がありましたのでそれを利用して。
ただ内容的に非常に幅広く、文化的に異なる側
面があるように感じましたので、そのあたりを調
整して作成した次第です。実際に使ってみると、
どうしてもまとまりが悪く、話の中でご紹介申し
上げたように、最近やはりいろんな考え方が出
て参りましたので、そのあたりの内容をカバー
して改訂版を作った、まあそういう経緯でござ
います。

それから、質問用紙でいただいた、一番幸せな
時代はいつかとか、あるいは哲学的な背景として、
幸福論との関連ですね。これに関しては、well-being
として、いろんな側面があるということをご紹介
しましたけれども、それと同様に、一概にどの時
代が幸せかとは言えないように思います。心理学的
では、個人の感じることを重視します。一方で社
会学ではデモグラフィック変数との関連を重視
します。こうしたアプローチの相違により研究内
容に相違があることにも留意せねばなりません。
こうした点に関しては、大石先生のとめられてい
るご著作や、心理学評論の特集が参考になると思
います。それから、藤森先生のご質問ですけれど
も、先ほどの北村先生の話とも関連しますが、こ
の評定値は確か 6.0 でしたね。

藤森: 6.7 となっています。

堀毛: はい。そこで、先生のデータを拝見しま
すと、実質的に日本では割と満足感が高いよう
です。一方、国際的に見ると日本は GNP が高い、
韓国も同じように高い経済成長率を持っている
のに、どちらも幸福感が低いのはどうしてなの
か。このことについて、例えば Diener は、マテ
リアリズムが絡んでいるのではないかと指摘して
います。物質へのこだわりみたいなものが強い
のではないかと。それは正解かどうか分かりませ
んが、昨今の政治状況などからしても、われわれ
が幸せかどうかということなどはあまり主題に
はならず、そういったことが関連しているの
ではないかなという感じがしました。

それから、介入という側面ですね、それをどう
いうふうにするのかというご質問をいただきました。
ポジティブ心理学的な介入ということでお答え
しますが、ご存知の方も多いと思いますけれど
も、Seligman et al. が、WEB 調査の中で 1 日
に三つの良いことを考えてごらんくださいとか、
その人の強みをあらかじめチェックして。それ
を寝る前にどう使ったか考えながら過ごして
ごらんください、などといったことをやって
います。それと同じようなやり方を考えてお
りまして、長所として抽出された行動や、短
所として抽出された行動を、個人にフィード
バックして、例えば 1 週間それを意識して過
ごしていただき、1 週間後。また 1 カ月、3
カ月、6 カ月後に行動をチェックして、有効
な介入手法になり得るか、サステイナブルな
介入として役立つかどうか

ということを検討したいと考えています。先ほども言いましたけれども、どうも心性は行動に反映されないようで、見通しは明るくはないのですが、試行的にやってみようと考えています。

最後のご質問ですけれども、サスティナビリティというのは、現時点から未来を見ることです。ただそこに行われている評価は、過去の評価をベースにしていると思います。これに関しては、幸福感の測定についても寺崎先生が、過去と現在と未来を分けて幸福感を測定する尺度を開発されていますが、そういった発想が必要かもしれません。少なくともサスティナブルということ考えた時には現時点が基準になると思います。現時点で、こういう状況にある中、そこから先をどう考えるかということですね。そうなると、社会との関係ということに関して、現状とこれから先、われわれが生きていく高齢化社会の中で、皆の幸せを考えるとすれば、いろんな角度から well-being の考え方についてアプローチする必要があるのだらうと思いました。

大坊：はい、どうもありがとうございました。最後の点につきましては、これはなかなか自分ではできないわけですが、現状の保護の先に取って不足のある現状を壊すということもしなければいけな

いということだと思います。それを実現するには心理学一つの科学ではできないと思っております。どうもありがとうございました。

おそらく未だこのお答えを聞いて、さらに質問などがあるかもしれませんが、少し時間を越えてしまいましたので、ここでお開きさせていただきたいと思っております。どの科学でもそうですが、要因分析の先にあること、つまり、要因分析をしたその先にどうアクションを起こすべきかが大きな問題だと思います。分析の段階で留まってしまう、足踏みしてしまうことが多い。ある意味では、個別の科学からすると現状では限界ということがありそうです。応用心理学とは、「応用」という点で、もっとラディカルに多様に考えていくべき場だと思いますので、この公開シンポジウムの記録は雑誌に掲載いたしますので、種々の観点から、どうぞ本学会にアプローチをしていただければと思います。

改めまして、今日の3人の話題提供者、および、藤森先生、指定討論ありがとうございました。お礼を込めて拍手をしたいと思っております。並びにこの時期には、種々のイベントが各地で行われております。その中で本学にお越しいただきました皆様にあつく感謝申し上げます。どうもありがとうございました。